秋田県文化財調査報告書第37集

能代・山本地区広域農道建設に伴う発掘調査報告書

—八森坂遺跡・南山ノ上遺跡・サシトリ台遺跡—

1976・3

秋田県埋蔵文化財センター

秋田県教育委員会

序

昭和48年度から着工している「広域営農団地農道整備事業・能代・山本地区工事」は，秋田県農政部農地整備課及び県土木部道路課の計画によって実施しているものであります。全長30,568メートルに及ぶ同農道の予定路線地区内に所在する遺跡の事前発掘調査は，今年で継続２年目に当たり，能代地区内の「八森坂遺跡」「南山ノ上遺跡」「サシトリ台遺跡」の３遺跡の調査を終了しました。

この調査によって東雲台地に点在する縄文時代から土師，須恵器を出土する遺跡の時代までの性格がより一層明らかになるものと考えられます。

農地整備に係る遺跡の保護と記録保存のため，緊急調査を実施しましたが，本報告書が研究者並びに遺跡保存への一助になれば幸いであります。おわりに調査を担当された各調査員並びにご協力いただきました能代市教育委員会，山本農林事務所土地改良課の方々に深甚なる謝意を表します。

昭和５１年３月

秋田県教育委員会

教育長　畠　山　芳　郎

目　　次

調査に至るまでの経過……2
調査の構成……2
遺跡の立地・現況と周辺遺跡……3
I　**八森坂遺跡**……4
1　調査方法と過程……4
2　遺構と遺物……5
3　まとめ……15
II　**南山ノ上遺跡**……28
1　調査方法と過程……28
2　遺構と遺物……29
3　まとめ……30
III　**サシトリ台遺跡**……35
1　調査方法と過程……35
2　遺構と遺物……36
3　まとめ……46

挿図・図版目次

八森坂遺跡

遺跡周辺地形図……1
挿図1　遺跡地形図……4
挿図2　円形ピット……5
挿図3・4　土器拓影……8・9
挿図5　土器拓影・石器・石製品……10
挿図6・7・8　石錘……11・12・13
挿図9　石器実測値表……14
挿図10　石錘重量分布図……15
図版1　遺跡のようす……17
図版2　遺物の出土状況……18
図版3　円形ピット……19
図版4・5・6　出土土器……20・21・22
図版7　出土石器・石製品……23
図版8・9・10・11　出土石器……24・25・26・27

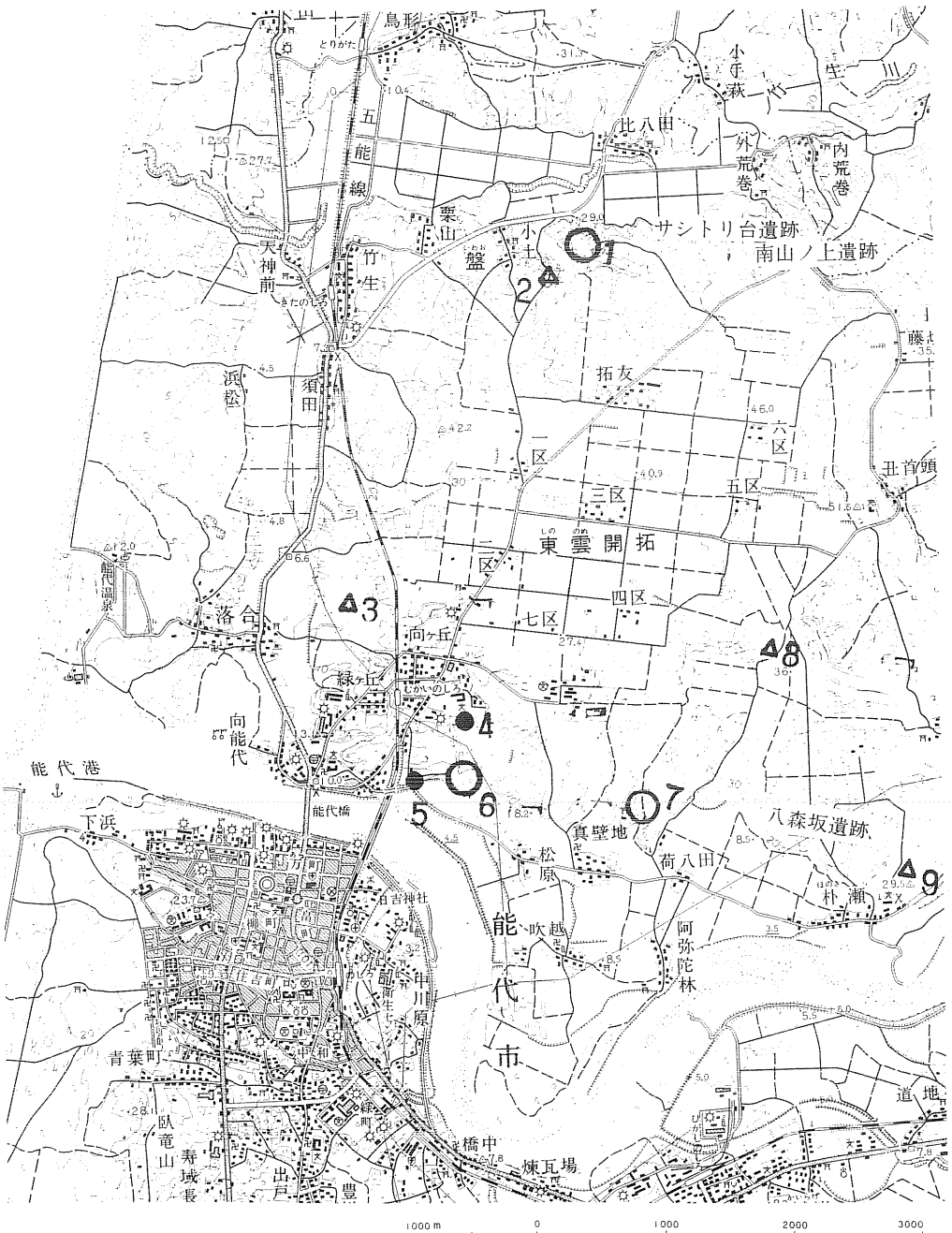
南山ノ上遺跡

挿図1　遺跡全体図……28
挿図2　1号竪穴遺構……29
挿図3　2号竪穴遺構……29
挿図4　1・2号竪穴遺構出土土器……30
図版1　南山ノ上・サシトリ台遺跡周辺の地形……32
図版2　遺跡・2号竪穴遺構……33
図版3　出土土器……34

サシトリ台遺跡

挿図1　遺跡発掘区……35
挿図2　遺構配置図……36
挿図3　1号竪穴遺構……37
挿図4　2号竪穴遺構……37
挿図5　3号竪穴遺構……38
挿図6　4号竪穴遺構……38
挿図7　4号竪穴遺構出土遺物……39
挿図8　5号竪穴遺構……40
挿図9　5号竪穴遺構出土遺物……40
挿図10　6号竪穴遺構……41
挿図11　6号竪穴遺構出土遺物……42
挿図12　7号竪穴遺構……42
挿図13　竪穴住居跡・8号・9号・10号竪穴遺構……44
挿図14　竪穴住居跡出土遺物……46
図版1　遺跡のようすと竪穴住居跡・7号・8号・9号・10号竪穴遺構……50
図版2　竪穴住居跡内遺物出土状況……51
図版3　4号竪穴遺構……52
図版4　5号竪穴遺構……53
図版5　6号竪穴遺構……54
図版6　竪穴住居跡出土遺物……55
図版7　4号・5号・6号竪穴遺構出土遺物……56

遺跡周辺地形図



1：50,000　能代

△　縄文土器散布地　（2．杉沢野遺跡　3．落合貝塚　8．大野遺跡　9．二林台遺跡）

●　土師器，須恵器散布地　（4．トドメキ遺跡　5．平影野遺跡）

○　館，チャシ　（1．平泉館　6．金山チャシ　7．サト館）

能代・山本地区広域農道建設に伴う発掘調査報告書

調査に至るまでの経過

昭和48年に秋田県農政部農地整備課は，山本郡峰浜村目名潟地区から能代市，山本町を経て八竜町鵜川地区に至る能代・山本地区広域農道建設を計画し，昭和49年度から用地買収と工事の一部着工を実施している。そして，昭和50年度には，能代地区の買収が行なわれることになり，工区の設定がなされた。

下記の八森坂，南山ノ上，サシトリ台の３遺跡は，その予定路線上や近接する位置にあるため県教育委員会が別記のような調査団を編成し，７月27日から調査を実施したものである。

調 査 の 構 成

・期　　日　昭和50年７月27日～８月10日

・調査主体　秋田県教育委員会

・調査協力団体　能代市教育委員会

・遺跡名と所在地

八 森 坂 遺 跡	能代市朴瀬字八森坂
南 山 ノ 山 遺 跡	能代市外荒巻字南山ノ上52―１
サシトリ台遺跡	能代市外荒巻字サシトリ台14―44

・調 査 員

伊　藤　種　秋	由利郡東由利町立玉米小学校教諭	（日本考古学協会員）
岩　見　誠　夫	秋田市立八橋小学校教諭	（日本考古学協会員）
永　瀬　福　男	山本郡山本町立森岳小学校教諭	（日本考古学協会員）
川　村　　正	能代市教育委員会	

・調査補助員

太　田　　実	能代市立東雲中学校教諭	（秋田考古学協会員）
阿　部　清　文	山本郡峰浜村水沢	（秋田考古学協会員）

・調査事務担当者

秋田県教育庁文化課	門　間　光　夫	主任学芸主事
	中　谷　雅　昭	学芸主事
能代市教育委員会	山　崎　　勝	社会教育係長
	小　林　幸　夫	社会教育係長

・調査協力

若　松　鉄四郎	能代市立鶴形中学校長	（能代市文化財保護委員）

村　木　悦　也　　北秋田郡上小阿仁村立上小阿仁中学校教諭　　（秋田考古学協会員）

能代市立東雲中学校郷土史クラブ

地　元　部　落

見上キゲ，荒木チエ，宮野ユキ子，三熊テイ子，芳賀キヨエ，芳賀光輝，畠山一仁，佐々木与七，佐々木マツエ，中野政美中野トキエ，佐々木勝郎，佐々木ナミ，佐々木由夫，佐々木和夫，佐藤チヨノ，成田ヤスエ，柴田長一

遺跡の立地・現況と周辺遺跡

秋田県の代表的河川の一つである米代川は，県北地方の降水を集めて日本海に注ぐ。米代川は，古代から現在に至るまで能代市のみならず，県北各地の政治・経済・文化の面に大きな影響を与えてきた。

米代川の河口近くの北岸から，東雲（しののめ）台地が北方に広がり，青森県との県境をなす白神山地の裾野に接する。

台地の標高は，40m前後である。

台地上は，開墾が進み田畑に利用されているが，水田化が著しい。

八森坂遺跡は，能代市朴瀬（ほのきせ）八森坂に所在し，東雲台地の南縁に位置する。眼下に米代川が流れる。現在，畑地として利用されているが，一部開田工事のため破壊されている。

南山ノ上遺跡は，能代市外荒巻南山ノ上52の１に，サシトリ台遺跡は，能代市サシトリ台14の44に所在する。両遺跡は台地の北縁に位置し，隣接しているため関連しているものと思われる。

サシトリ台遺跡は，１km四方に須恵器，土師器片，鉄滓が多量に分布するため，大規模な遺跡である可能性が強い。現在，開田工事が進行中であるため，遺跡破壊が心配される。

東雲台地には，これら遺跡のほか縄文，歴史時代の遺跡が点在する。[(1)(2)] いずれも台地の周縁に位置し，台地中央部には存在しないようである。このことは，米代川，日本海を強く意識したためと考えられる。

このうち発掘調査された遺跡は，金山チャシ[(3)]と平影野遺跡[(4)]である。

台地の南，米代川の対岸には「野代営」の擬定地としての大館遺跡[(5)]や縄文晩期の代表的貝塚である柏子所遺跡[(6)]がある。

(1)　文化財保護委員会「全国遺跡地図（秋田県）」　（昭和40年）
(2)　能代市文化財保護委員会「能代市遺跡調査表」（昭和49年）
(3)　大和久震平「能代市金山チャシ発掘報告」秋田県立鷹巣農林高等学校郷土史研究部報告第１冊（昭和32年）
(4)　昭和47年発掘調査されたが報告書は未刊である。土師器，フイゴロ，鉄滓が出土し製鉄遺構と考えられた。
(5)　能代市教育委員会「能代市大館遺跡（野代営擬定地）」（昭和48年）「大館遺跡発掘調査概報」（昭和49年）「大館遺跡第４次発掘調査概報」（昭和50年）
(6)　大和久震平「柏子所貝塚発掘調査報告書」（昭和41年）

Ⅰ 八 森 坂 遺 跡

1．調査の方法とその過程

調査地点は，能代営林署苗圃へ通ずる道路と築法師部落へ通ずる道路の分岐点に位置する畑地である。東雲台地南縁標高26mの所で，朴瀬部落から 500mはなれている。調査の範囲は，2m×2mの東西A・B・C，南北1～25までのグリットを設定し調査を行なった。

調 査 日 誌

7月27日（日）　晴

道路予定線上にグリッドを設定し調査にとりかかる。B1，A2，B3を調査。遺物は黒褐色土から多く出土。縄文土器片と石錘4個出土。

7月28日（月）　雨のち曇

雨はげしく作業中止。三角点をさがす。

7月29日（火）　曇一時雨

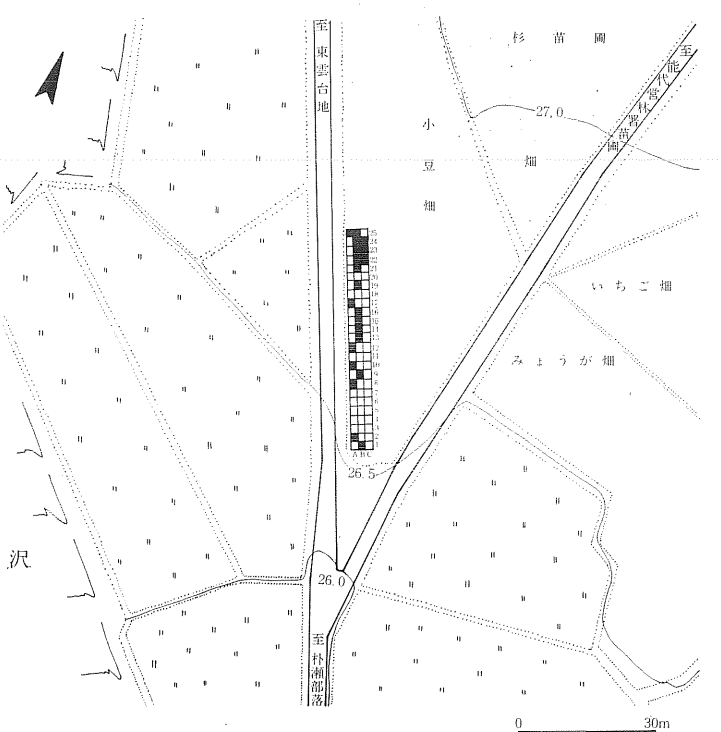
A2, B1, B3, を調査しのち調査区域をA8，A10, B9，B12～16, B21, B23～25と拡大する。土器の出土状態をみると細く押しつぶされたようになっており，これは以前畑の整地にブルトーザーを使用したためと考えられる。遺構は検出されず。出土遺物は縄文土器片・石錘・石匙・石箆・石鏃。

7月30日（水）　晴

三角点から調査地区に基準点を移す。B22～25精査。C22, 23, A25, B14, 15を調査す。B22, 23で円形の遺構検出。出土遺物は縄文土器片・石錘・石匙・石箆。

7月31日（木）　晴

出土遺構の精査と実測，地形測量，出土土器洗いを行う。出土遺物は縄文土器片，石匙，石



挿図1　遺 跡 地 形 図

錘。

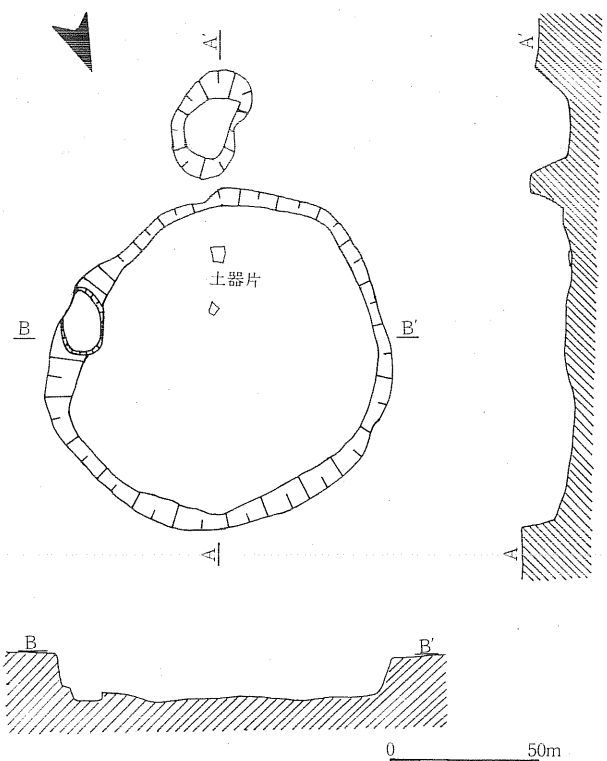
8月1日（金）　晴

昨日に引き続き実測と地形測量，土器洗いを行う。作業終了午後3時30分。

2．遺構と遺物

A　遺　　構　（挿図2，図版3）

B22，23から検出の円形ピットである，南北 2.1m，東西2.30m，深さ0.30mあり，東側ピットの壁に接して径0.40m，深さ0.30mの柱穴らしい小ピットと円形ピットの南側の周囲に径0.75m，深さ0.30mの小ピット1個が検出されたが，他にこのような施設は検出されなかった。遺構は，地山であるロームを掘りこんであり，床面に縄文のみの土器片が検出された。



挿図2　円形ピット

B　出土遺物

(1)　土　　器

発掘調査によって出土した土器は殆んどが縄文土器で他に少量の土師器と須恵器がある。

a　縄文土器

発掘された土器には復元できるものが殆んどなかったので，文様について分類し説明を加える。

㋑　第1群土器

本群は，撚糸圧痕を有するものである。

第1類土器（挿図3―1～24，30，31，34　図版4）

1は推定口径18cm，黒褐色を呈し焼成良好胎土に砂粒と繊維を含み胴部にR縄文が施こされている。2は推定口径17cmで褐色を呈しくの字に外反する口縁を持ち，胴部にR縄文が施文され胎土に砂粒と繊維を含む。

本類の口縁部撚糸圧痕には，細いものと太いものとがある。23は焼成良好，灰褐色を呈する。口唇部近くが無文となり胎土に砂粒と繊維を含む。

第2類土器（挿図4―36，38　図版4）

本類は，口縁部に撚糸圧痕による沈線状のものが施文されているものである。どちらも焼成良好。

㊐ 第2群土器

口縁部文様帯と胴部との境に粘土による貼付隆帯をめぐらした土器である。この隆帯上には，太い縄目，結び目，竹管状のものによる凹文のあるものである。これらは6類に分けられる。

第1類土器（挿図3—39～44　図版4）

これらの土器は，隆帯に縄目が43にみられるように縄の結び目を押圧したもので焼成不良，胎土に砂粒繊維を含む。

第2類土器（挿図3—45～47，50，52，55，61　図版4，5）

本類は，隆帯上に爪形の刺突文のあるもので，50のように口縁部に撚糸圧痕を有するものもある。胎土に砂粒繊維を含み，焼成がよくなく黒褐色を呈する。

第3類土器（挿図3—48，51　挿図4—58　図版4，5）

本類は，隆帯と沈線にも爪形の刺突文のあるもので，58は口縁部に撚糸，胴部にはR縄文が施文され胎土に繊維と少量の砂粒を含み内部がみがかれている土器である。

第4類土器（挿図3—49，53，54，56，57　挿図4—68　図版4，5）

本類は，隆帯上に指頭圧痕のある土器である。

第5類土器（挿図4—60，64～67，69～72　図版5）

本類は，低い隆帯上に爪形の刺突文を有し胴部にR縄文が施文されている。

第6類土器（挿図4—62，63　図版5）

この類の土器は同一個体と考えられる。口縁部に右斜行のR縄文を施文し胴部との境に2条の隆帯をめぐらしている。62は文様帯がへって消えかかっているが同様のものと思われる。

㊅ 第3群土器

この群は，口縁部，胴部に沈線の印されている土器である。

第1類土器（挿図4—59　図版5）

本類は，口唇部に2条の沈線をめぐらし，口縁部の隆帯に指頭圧痕があり胎土に繊維と砂粒を含み黒褐色を呈し，推定口径19cmある。

第2類土器（挿図4—79～82　図版6）

本類は胴部破片であるが1～2条の沈線がめぐらされ，全面にR縄文が施文されているものである。

㊀ 第4群土器

縄文のみ施文された土器片である。

第1類土器（挿図4—73～76，87　図版5，6）

本類は，羽状縄文のある土器である。胎土に砂粒と繊維を含み茶褐色を呈する。

第2類土器（挿図3—25～29，32，33　図版4）

本類は，Ｒ縄文と絡条体の施文がなされているものである。

第３類土器（挿図４―83～92，95，97～99　図版６）

本類は，斜縄文のみの施文であり，縄文の殆んどがＲよりである。88は，ＬＲの組み合わせとなっている。

㋭　**第５群土器**（挿図４―94　図版６）

胴部の破片で沈線がめぐらされ底部に垂直に擦痕を有する土器である。

㋬　**第６群土器**（挿図４―93　図版６）

鋸歯状口唇をなし，口縁部に沈線が施文されている焼成良好な土器である。

㋣　**そ　の　他**

底部破片（挿図５―100～103　図版６）

100は，底径14cm。101は，底径９cmありどちらも上底である。102は，底径11.4cm。103は，底径11cmあり平底である。以上の土器は胎土に砂粒と繊維を含む。

ｂ　土　　師　　器（挿図５―104～106　図版６―107，108，112）

104は，底径4.8cm，推定口径11cm，推定高５cmの土師器の杯で底部に回転糸切痕を有し，再調整のない褐色を呈するもので，105は，推定底径4.5cmある杯で，回転糸切痕を有する。106は，推定口径14.5cmある杯の破片で褐色を呈する。107，108，112は土師器かめの破片である。

ｃ　須　　恵　　器（図版６―109～111）

須恵器かめの破片で叩目痕を有する。

(2)　石　器・石製品

磨製石斧（挿図９　挿図５）

石　　匙（挿図９　挿図５）

たて型が60％を示める。

石　　鏃（挿図９　挿図５）

石　　箆（挿図９　挿図５）

剥片石器（挿図９　挿図５）

石　　皿（挿図５―43）

両面が研磨され，口縁がとがっている破片である。形の全容は知り得ないが，円形だとすれば推定口径20cmある。

凹　　石（挿図８―65，72，73　図版11）

この中には，65のようにどちらが先に使用されたか不明であるが凹石としての使用痕と石錘としての使用痕がある。

石　　錘（挿図10，８，９　図版８～11）

調査における出土量は完形品が64個を数え，欠損品を含めると68個となる。これらの重量による

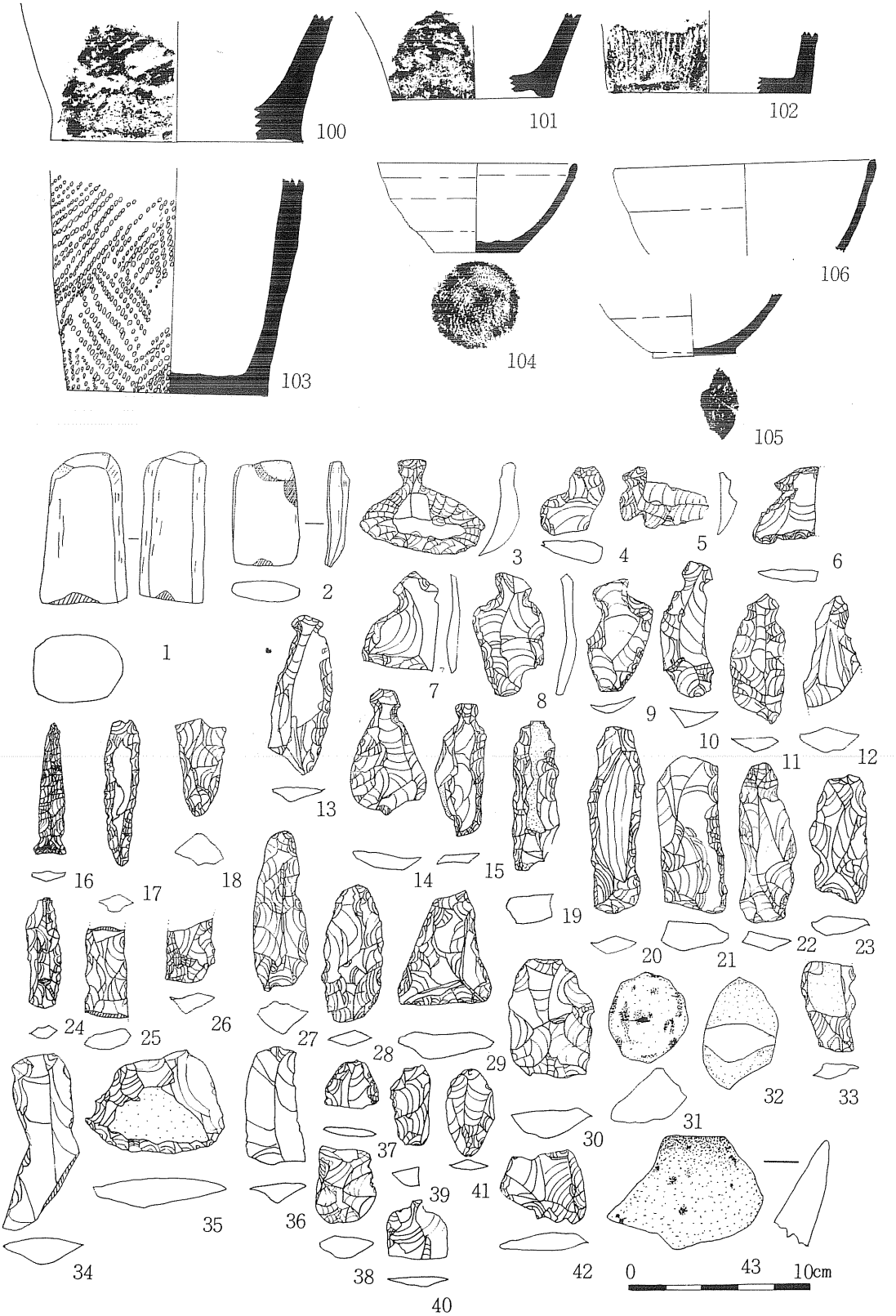
挿図3　土　器　拓　影

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
0
10cm

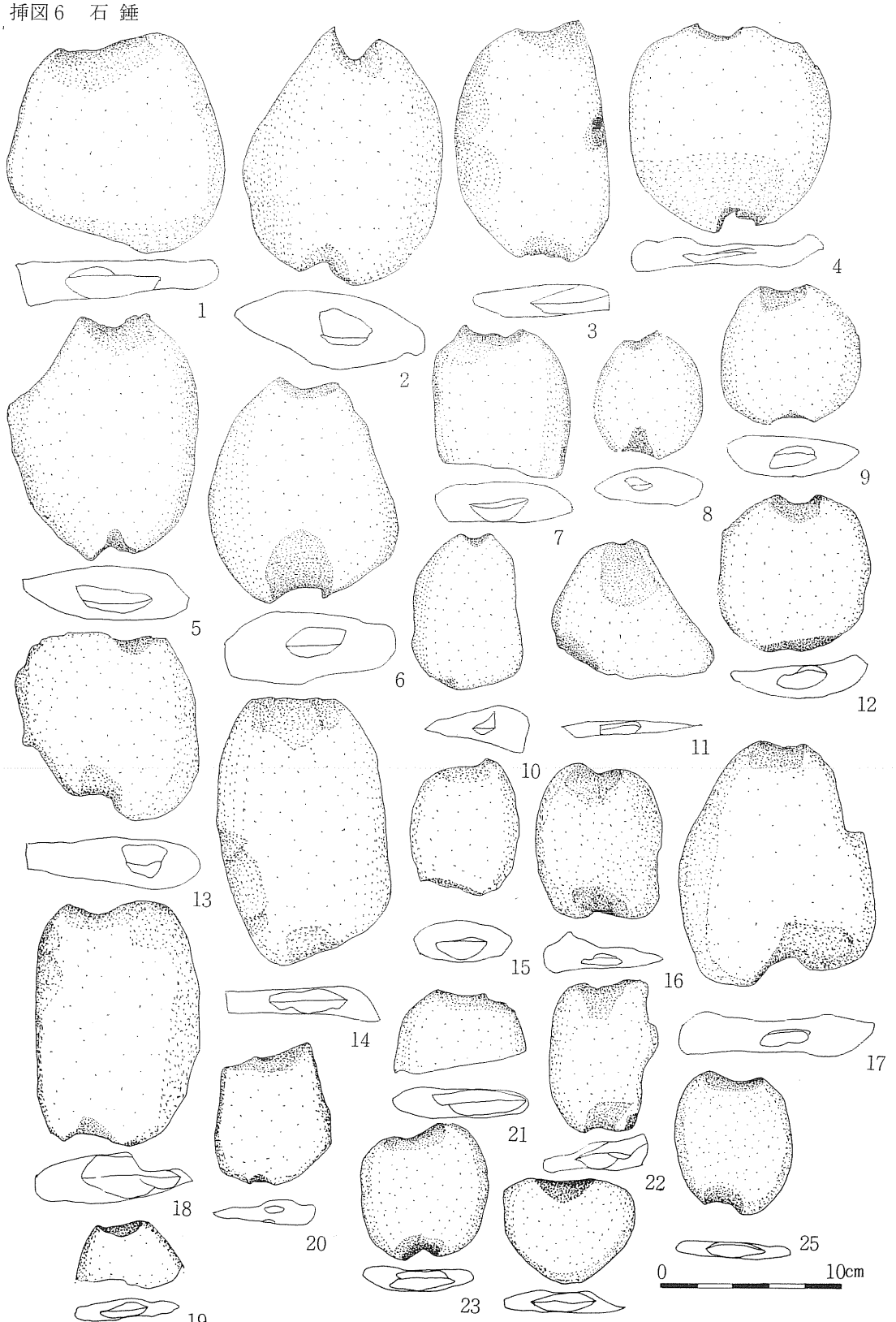
挿図4　土　器　拓　影

58
59
60
61
62
63
64
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
0
10cm

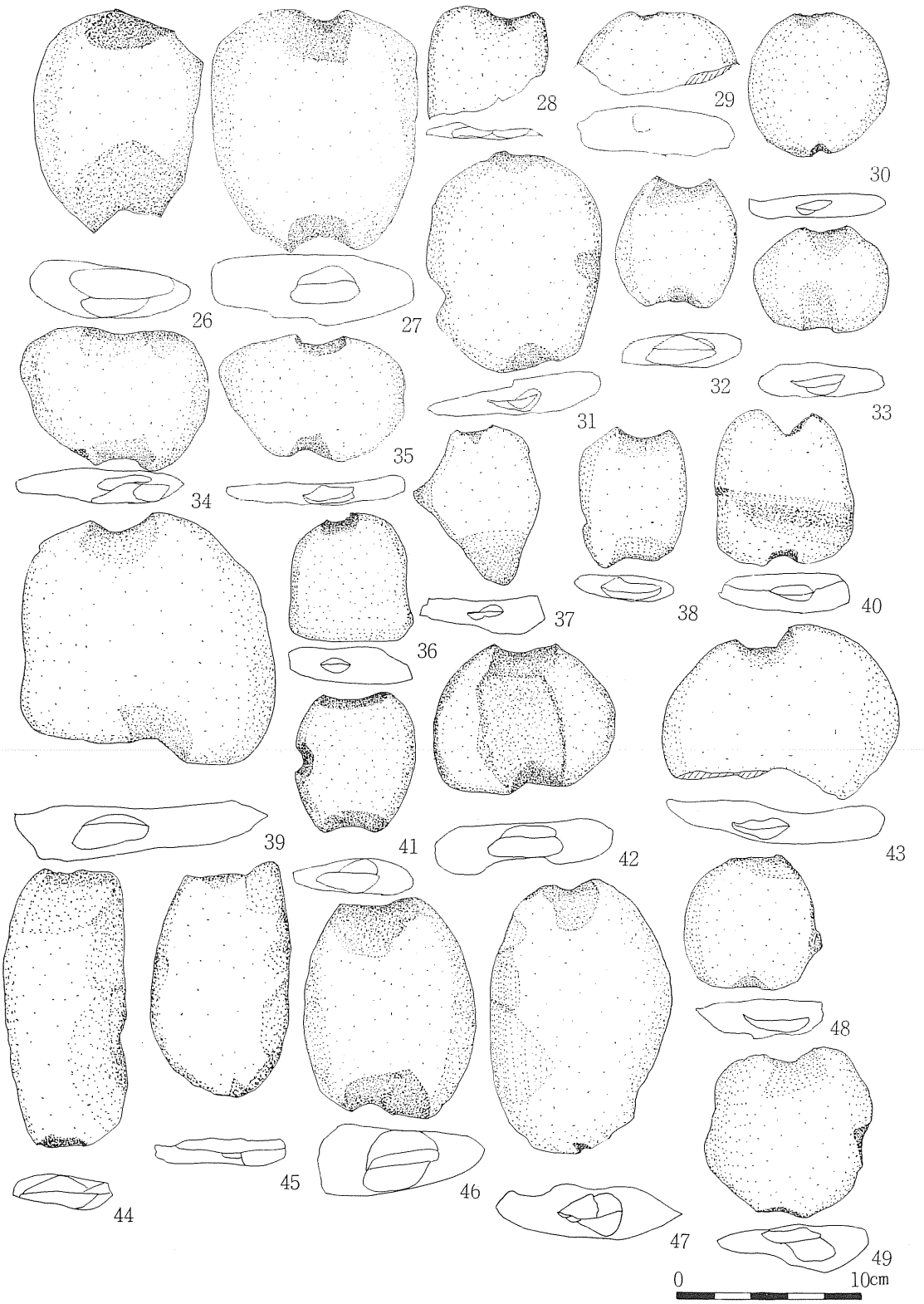
挿図５　土器拓影・石器石製品



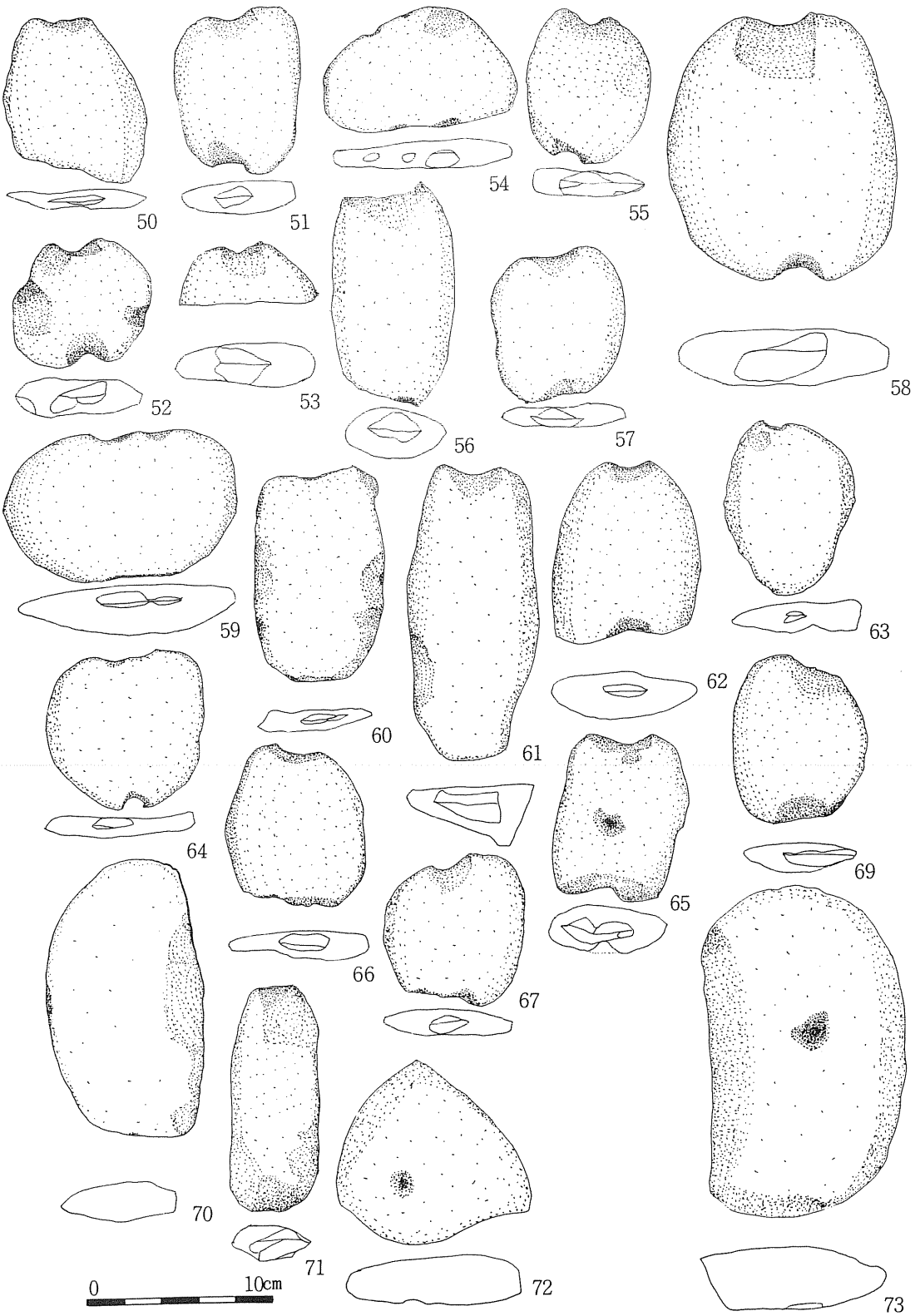
挿図6　石 錘



挿図7　石 錘


26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
0
10cm

挿図８　石錘 凹石


50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
69
70
71
72
73
0
10cm

挿図9　石器実測値表

	No.	たて (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	石質	形態	備考
磨製石斧	1		4.7	3.5	緑泥片岩		欠損品
	2	5.7	3.6	1.2	〃		
石匙	3	5.0	6.8	1.1	硅質頁岩	横	
	4	3.5		1.2	〃	〃	欠損品
	5	3.4	4.8	0.8	〃	〃	
	6	3.9		0.6	〃	〃	欠損品
	7	5.5		0.5	〃	〃	欠損品
	8	6.8	3.9	0.4	〃	たて	
	9	6.2	3.5	0.5	〃	〃	
	10	7.5	2.5	0.9	〃	〃	
	11	7.3	3.0	0.8	〃	〃	
	12		3.0	1.3	〃	〃	欠損品
	13	8.9	3.2	0.8	〃	〃	
	14	6.9	4.2	0.9	〃	〃	
	15	7.4	2.7	0.5	〃	〃	
石鏃	16	7.3	1.4	0.5	〃	有柄	
	17	8.0	2.0	0.9	〃	無柄	
石篦	18		2.8	1.7	〃		欠損品
	19	7.9	2.3	1.5	〃		
	20	10.3	2.9	0.9	〃		
	21	8.6	3.4	1.6	〃		
	22	8.9	3.0	0.8	〃		
	23	7.0	3.1	1.0	〃		
	24	6.1	1.8	0.6	〃		
	25		2.2	1.0	めのう		欠損品
	26		2.7	0.9	硅質頁岩		欠損品
	27	8.7	2.8	1.7	〃		
	28	7.5	3.7	0.8	〃		
	29	6.0	5.0	1.4	〃		
	30	6.5	4.7	1.5	〃		
軽石	31	5.0	4.2	2.8			10 g
	32	6.0	4.0	2.0			15 g
剥片石器	33	5.0	3.0	0.8	硅質頁岩		
	34	9.3	3.4	1.5	〃		
	35	5.2	7.8	1.6	〃		
	36	6.5	2.9	1.0	〃		
	37	2.5	2.9	0.4	〃		
	38	4.0	3.3	1.2	めのう		
	39	4.2	2.2	1.0	硅質頁岩		
	40	3.3	3.4	0.6	〃		
	41	4.8	2.6	0.5	〃		
	42		4.7	1.0	〃		

頻度数をみると，100g～200gのものが約45%を示め，50～ 400gまででは約76%を示める。また，最大重量を示す石錘は 1,050gである。

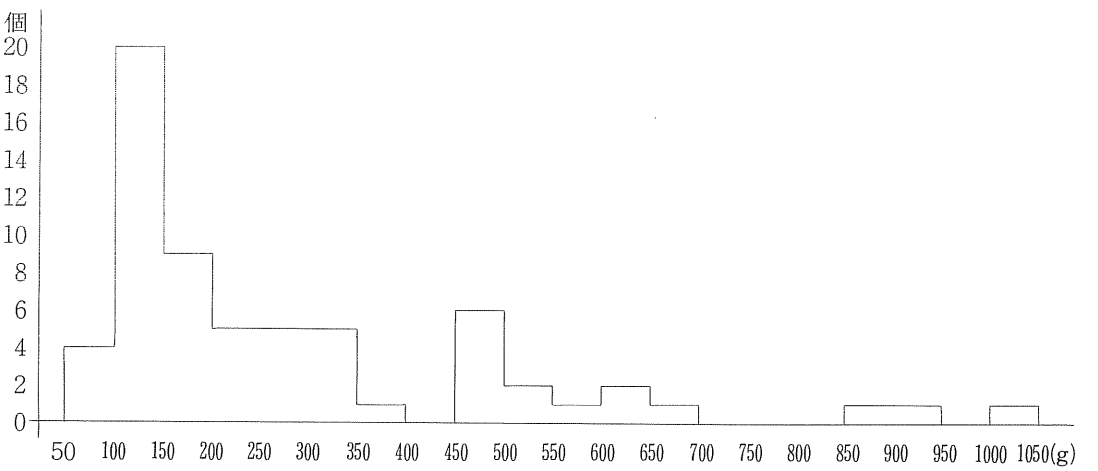
これらの石錘は，重量ごとに使い分けをしたのではないかと考えられる。

切り目の方向からみると，2方向の切り方，3方向の切り方，4方向の切り方とあり，石に対して長径の切り目が86%，短径が6%で他は3方向，4方向の切り目である。

これらの石錘は，米代川の河原から採集した自然礫を加工したものである。

軽　　石（挿図5—31，32　挿図10）

挿図10　石錘重量分布図



3．ま　と　め

出土した縄文土器第1群のものは，口縁部の文様が撚糸文によっており，第2群のものは頸部に粘土紐による貼付隆帯が伴い，それに指頭圧痕文，爪形文のあるものである。第3群のものは沈線を有するものである。第4群のものは斜行，羽状縄文の施文されたものである。これらの土器は大部分が繊維を含有する。以上の土器は，縄文前期前半円筒下層a式b式のものと思われる。第4群のものは，第1～3群に伴うものであろう。第5群のものは沈線と擦痕のある1土器片で，上記のものよりは時代が下降するものと思われるが，編年上の位置ははっきりしない。第6群土器は，黒色表土とその下の黒褐色土層の境から出土したもので，縄文晩期の土器片と思われる。

土師器，須恵器は黒色表土から出土したもので，土師器はろくろ水挽き成形で底部に回転糸切痕があり，口径に比し底径が小さく11世紀頃のものと思われる。須恵器は叩目痕を有する甕の小破片で，土師器と同じ時期のものと思われる。

遺構は，グリッドB22・23で検出された小型の円形ピットがある。この床面から第4群の土器片が発見されていることから，円筒下層のa・b式期のものと考えられる。しかし，その性格は不明である。

多量に出土した石錘をはじめとする石器は，米代川の河原の礫や，附近に存在すると考えられる堆積岩を用いたものである。このほかには，黒耀石の剝片が1片出土している。

参　考　文　献

・奥　山　　潤編　大館鳳鳴高等学校社会部考古班　1971　「茂屋下岱式土器群」
・奥　山　　潤　昭和47年　「芋掘沢遺跡発掘調査報告書」　大館市教育委員会
・江　坂　輝　弥編　1970　「石神遺跡」　ニュー・サイエンス社
・青森市教育委員会　昭和49年　「中の平遺跡発掘調査報告書」
・渡　辺　　誠　昭和48年　「縄文時代の漁業」　雄山閣
・村　越　　潔　昭和49年　「円筒土器文化」　雄山閣
・奥　山　　潤・板　橋　範　芳　1975　「上ノ山遺跡」　大館市史編さん委員会

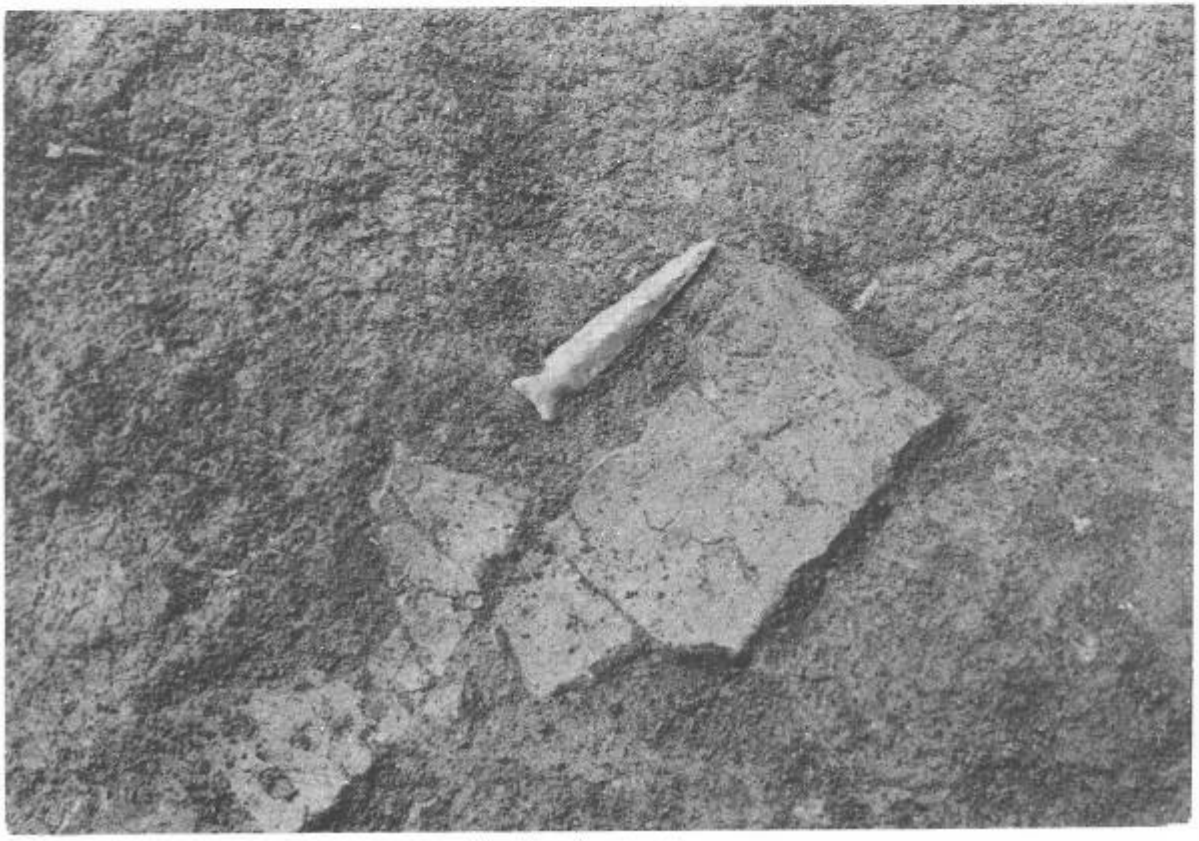
図版1

遺　跡　遠　景

遺跡調査前のようす

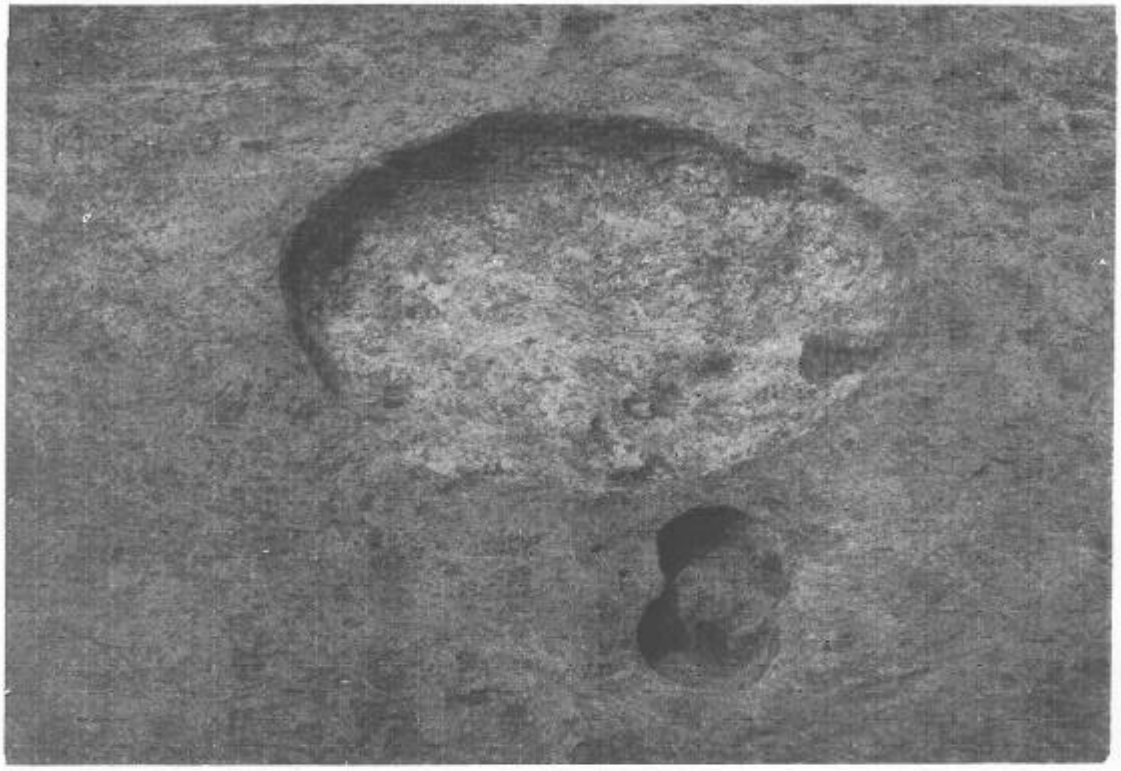
図版 2

発　掘　風　景

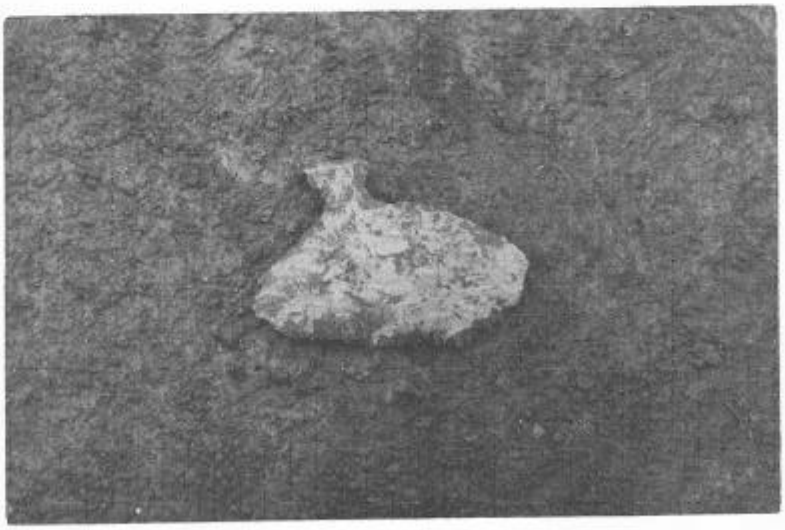


遺物出土状況

図版 3

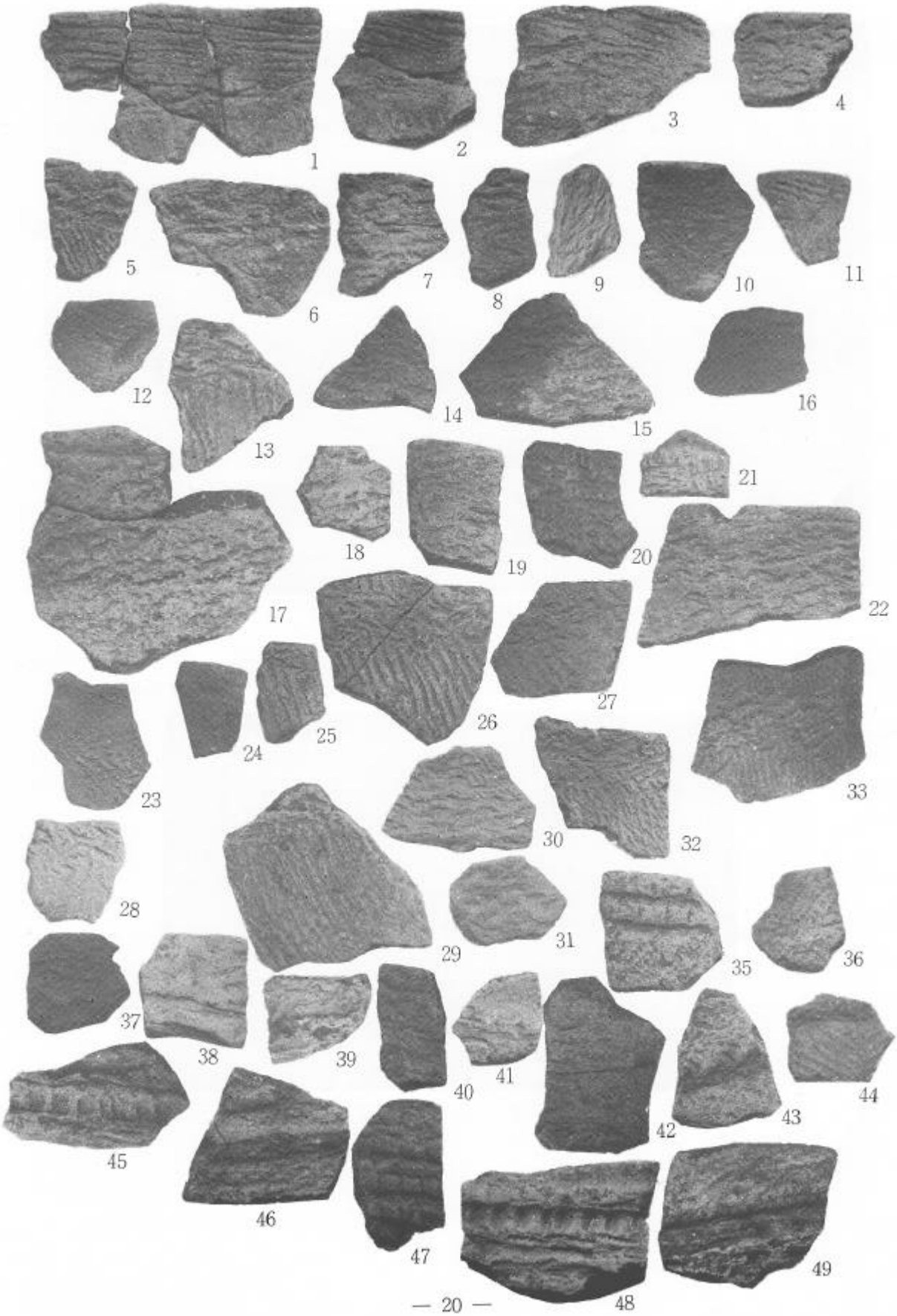


円　形　ピ　ッ　ト

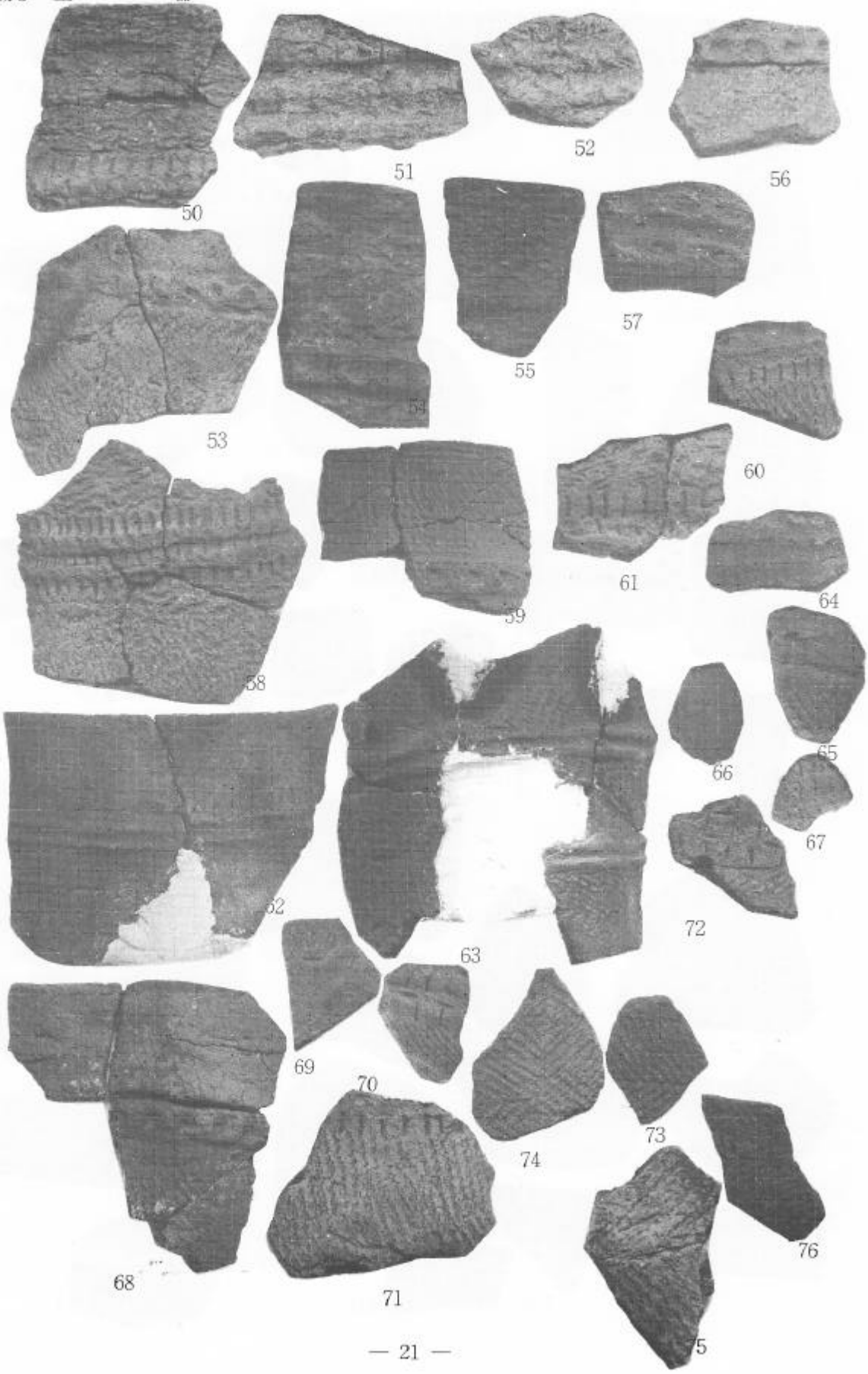


石　匙　出　土　状　況

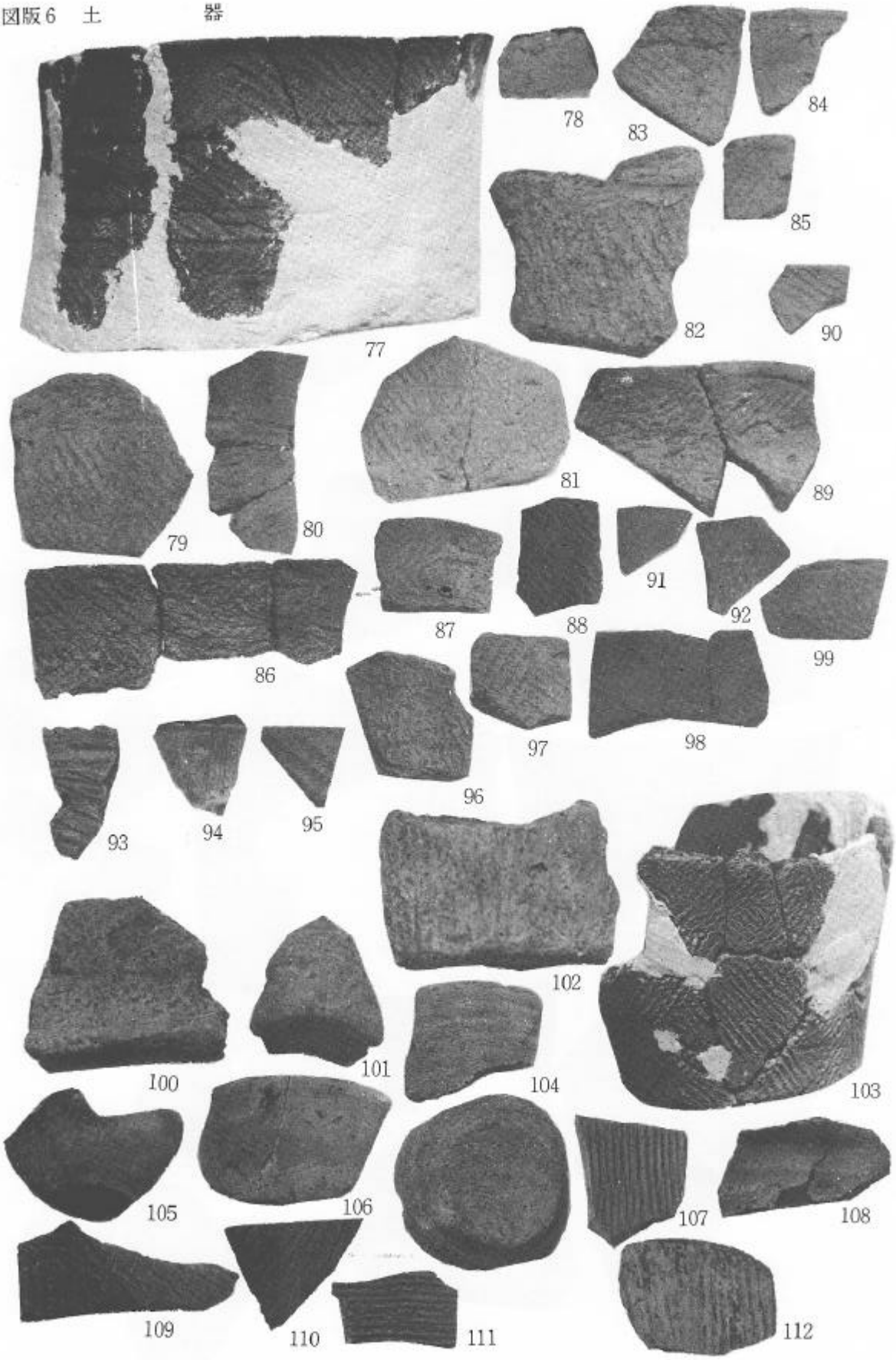
図版4　土　　器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49

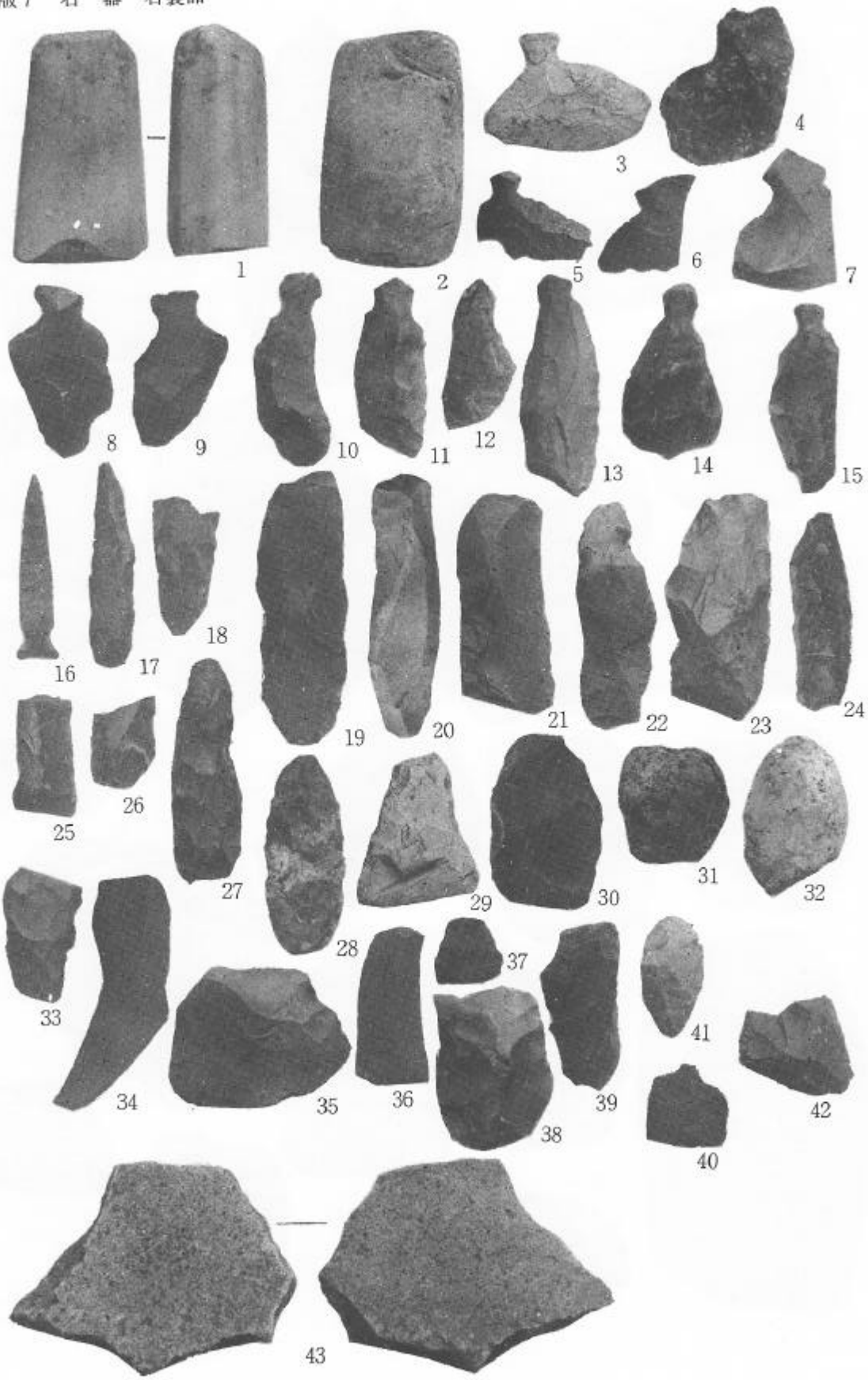
図版5　土　　器


50
51
52
56
53
54
55
57
60
58
59
61
64
65
66
67
62
63
72
69
70
74
73
76
68
71
75

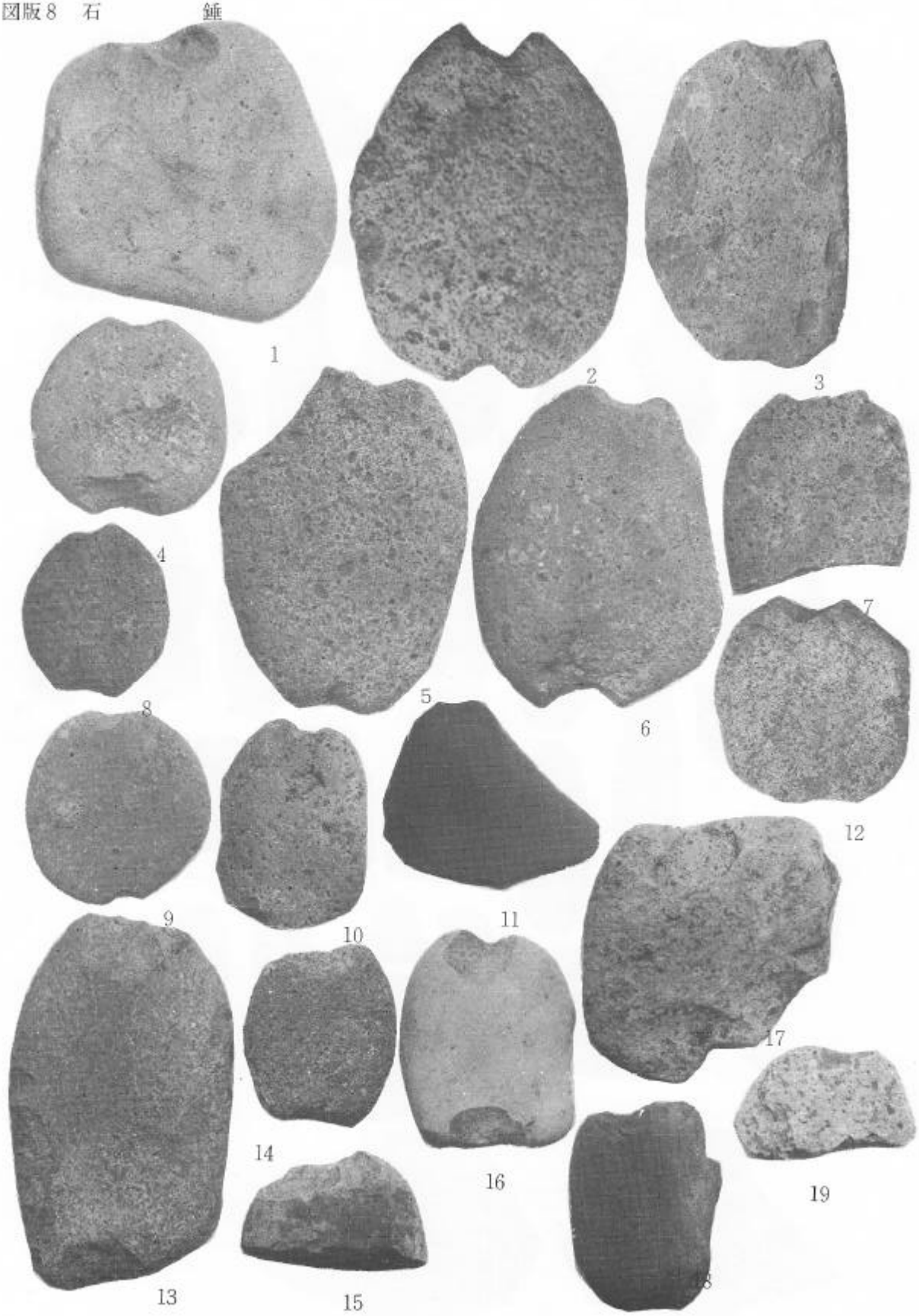
図版6　土　　器


77
78
83
84
85
82
90
79
80
81
89
91
87
88
92
99
86
97
98
96
93
94
95
102
100
101
104
103
105
106
107
108
109
110
111
112

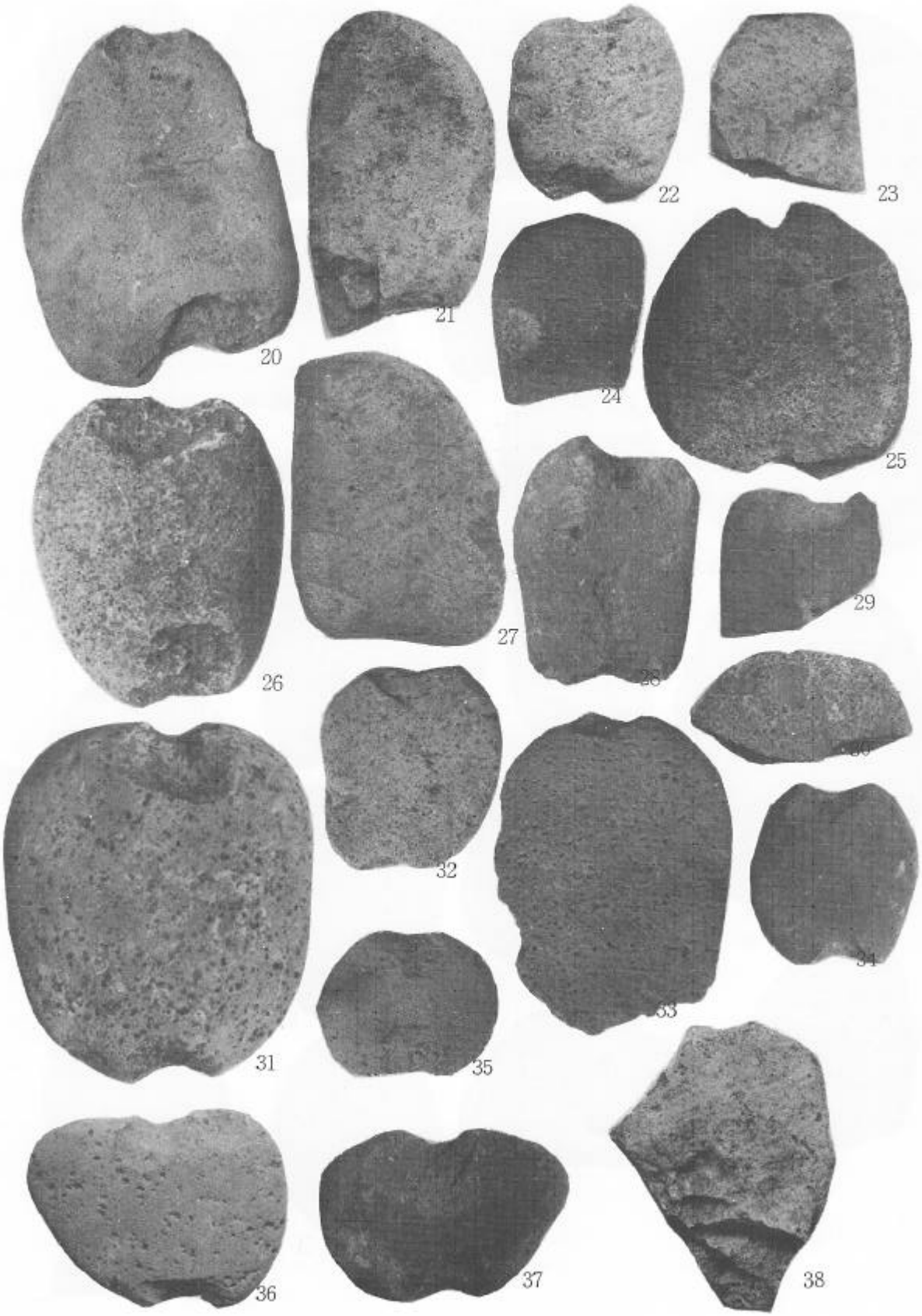
図版7　石　器・石製品


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43

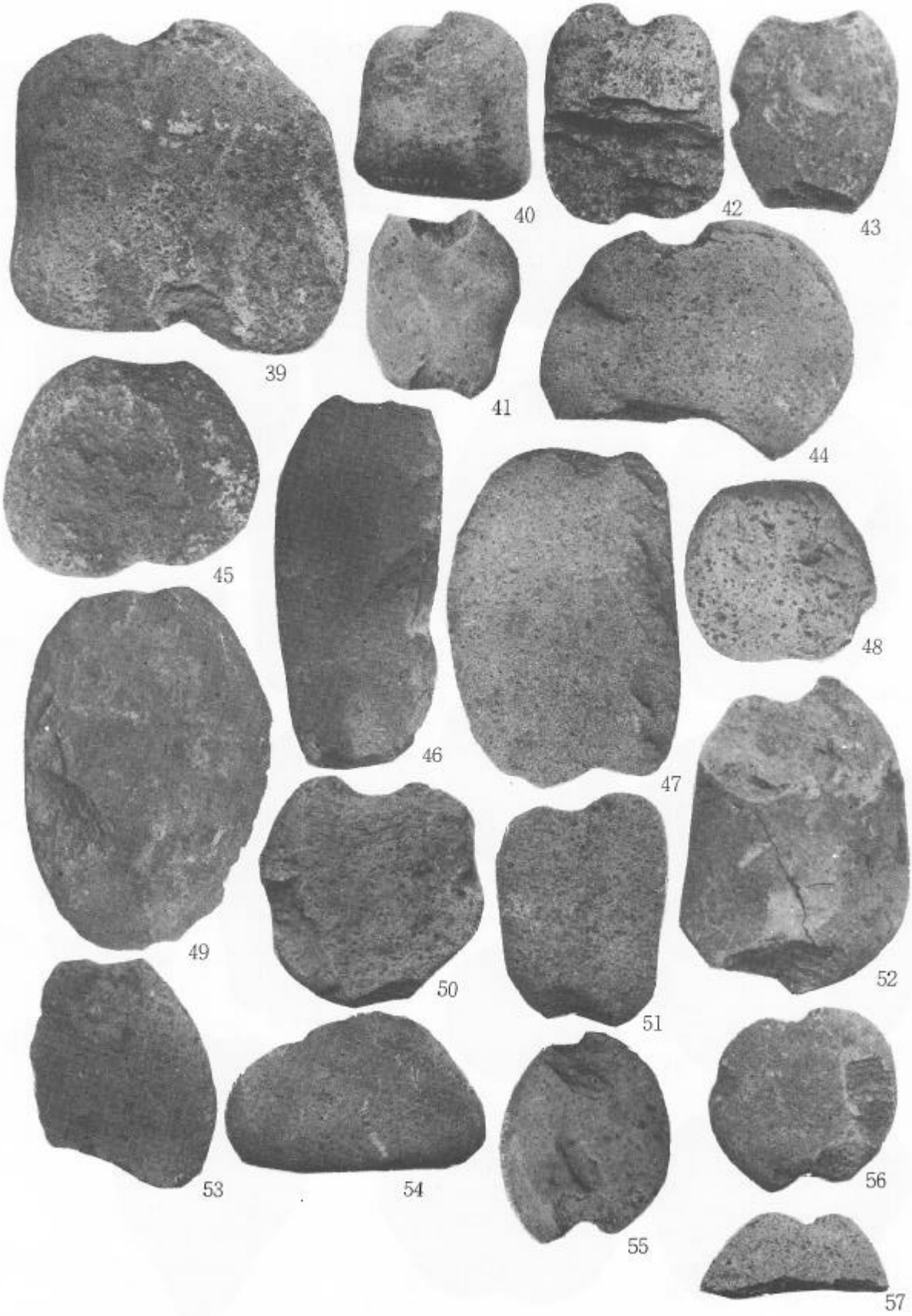
図版8　石　　錘



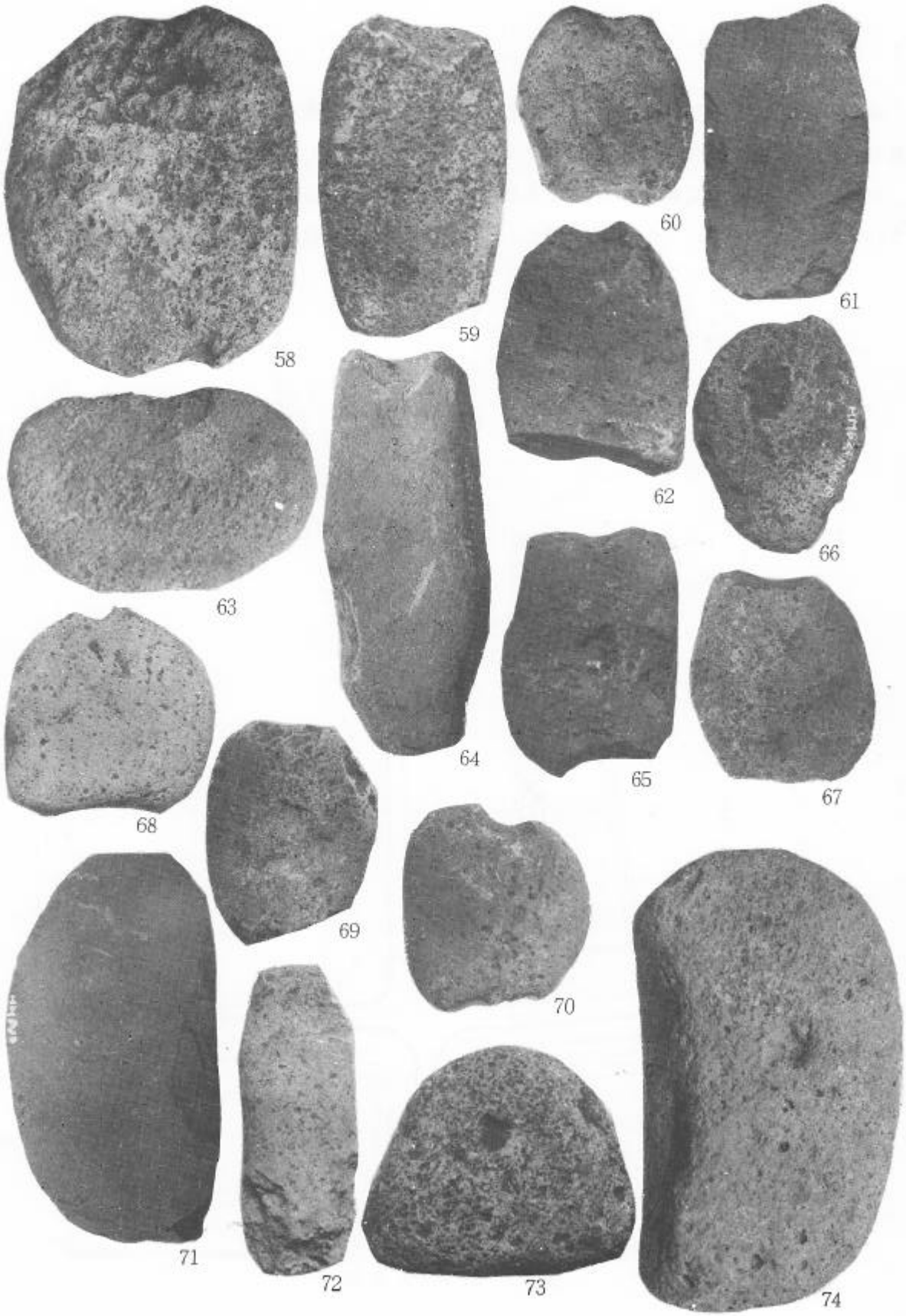
図版 9　石　　錘



図版10　石　　錘



図版11　石　錘　凹　石

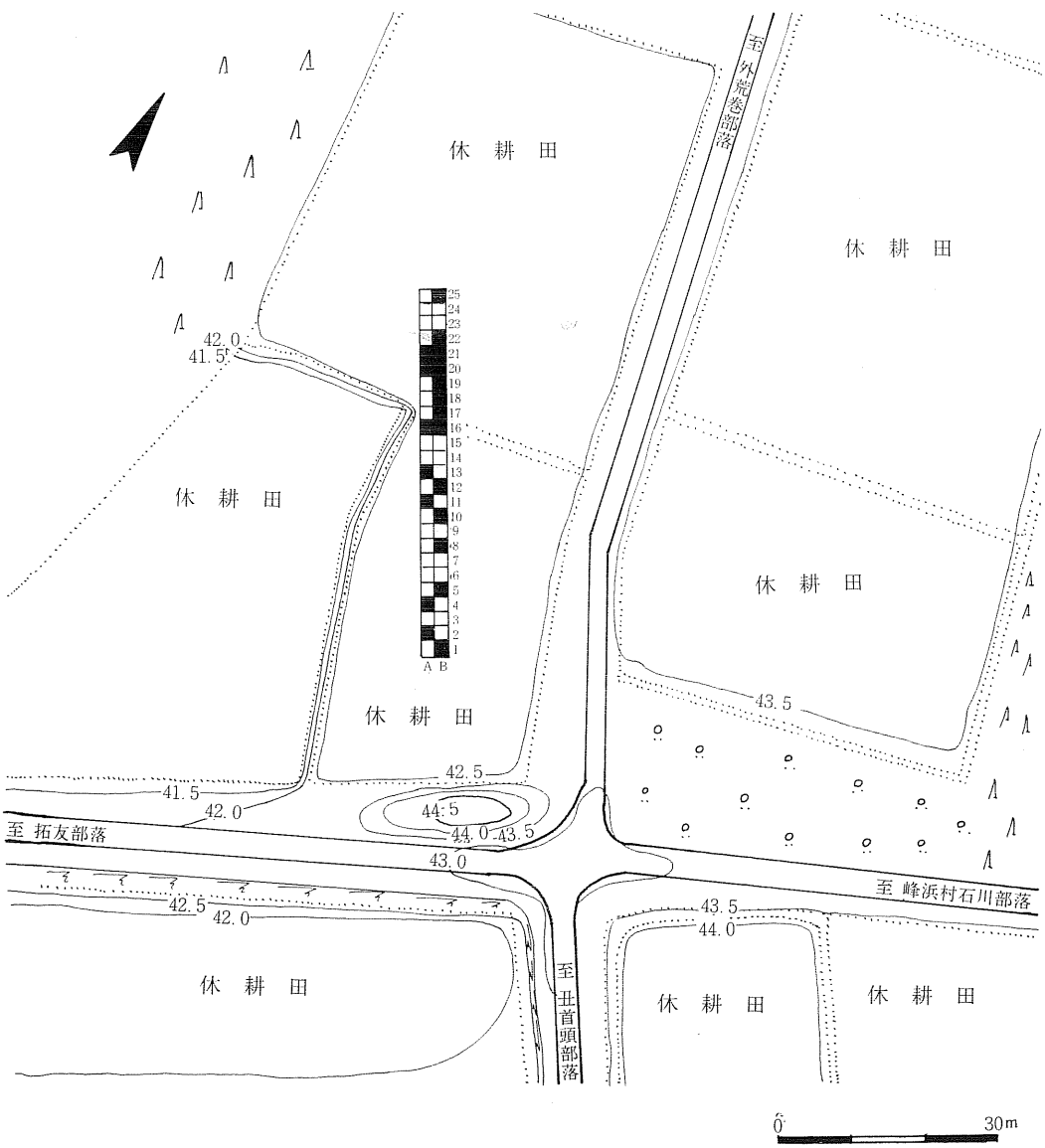


II 南山ノ上遺跡

1．調査方法と過程

調査対象地は，拓友部落から峰浜村石川部落に至る農道と，外荒巻部落から丑首頭部落へ抜ける農道の交叉点の傍にあり，開田の為一部ブルドーザーで平坦化された所である。

中央部に広域農道予定線の杭が打ってあり，調査はこの杭を中心に，できるかぎり原地形の残っている地点を選定して，グリッドを設定し，実施した。グリッドは２ｍ四方のもので，算用数字と



挿図１　遺跡全体図

アルファベットの組み合せで呼び位置づけた。

調　査　日　誌

8月2日（土）　晴

8時30分，遺跡にて作業員である外荒巻部落の方々と調査の目的と方法について話し合い，農道予定線上にグリッドを設定し発掘にとりかかる。

A2，4，11，B1，5，8，10を発掘したが，遺構は発見されず。出土遺物は土師器細片数個のみである。

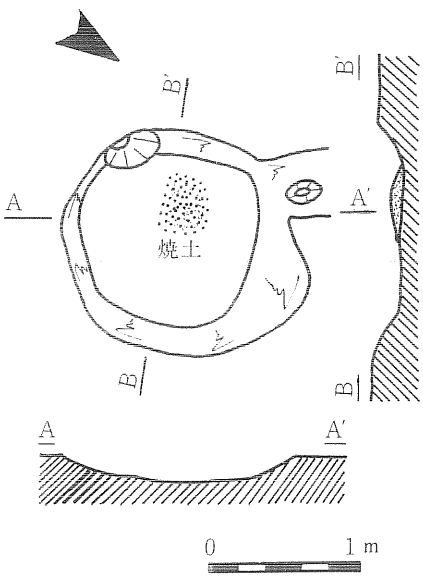
午後，能代市教育委員会の小林係長，川村主事，市文化財保護委員　鶴形中学校長若松鉄四郎氏来跡。

8月3日（日）　晴

昨日に引き続き，グリットを掘り進める。次の調査地であるサシトリ台へ松林中の三角点から基準点を移す。A16，B16，17，A20，21，B20，21の二カ所から竪穴遺構が発見される。

8月4日（月）　晴

竪穴遺構の写真撮影と実測を行う。午後からサシトリ台遺跡の調査にとりかかる。



挿図2　1号竪穴遺構

2．遺構と遺物

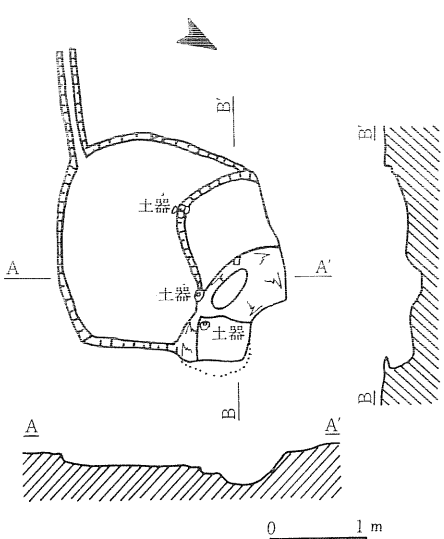
発見された遺構は，1号，2号と名付けた竪穴遺構である。出土遺物は，土師器杯形土器，甕形土器，須恵器壺形土器，石鏃1がある。土器はいずれも破片である。

1号竪穴遺構

〈遺構〉（挿図2）

A16，B16，17で発見されたものである。平面プランは不整円形で，径は1.50～1.72m，深さは約20cmある。壁の一部から浅い溝状のものが外にのびる。柱穴状の浅いピットが2個存在し，床上に焼土が投棄されていた。埋土は茶褐色土層であった。

〈出土遺物〉（挿図4(2)(5)，図版2）



挿図3　2号竪穴遺構

埋土中より土師器杯形土器の破片，甕形土器の破片，須恵器小破片が出土した。また埋土上部から頁岩質の石鏃が１個出土した。

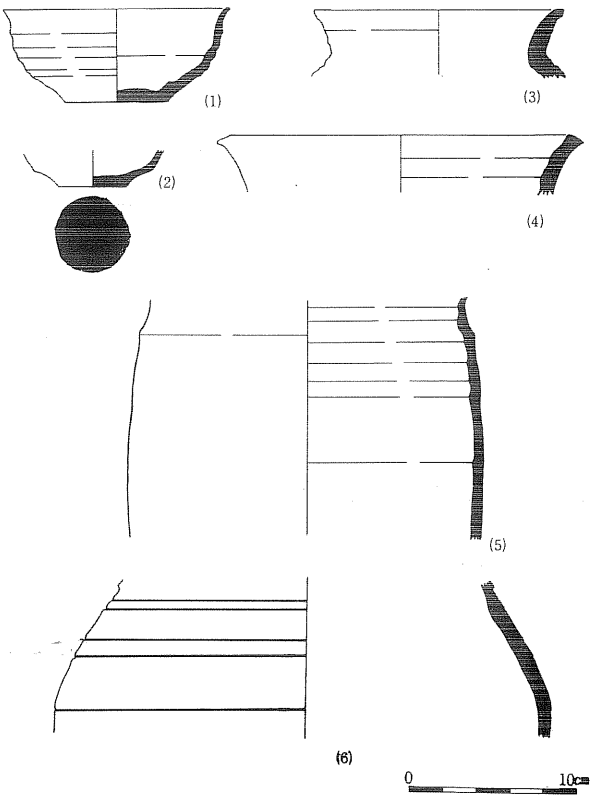
杯形土器(2)は底部の一破片で，ロクロ水挽き成形で底部に回転糸切痕があり，再調整は見られない。甕形土器(5)は胴部の一破片で，赤褐色をしており，ロクロ成形のものである。

２号竪穴遺構

〈遺構〉（挿図３　図版１）

A20，21，B20，21で発見されたもので，平面プランは一辺約2.20m，出入りのある不整方形とも言うべきであろうか。

南のコーナーから浅い溝状のものが外にのびる。床面は二段になっており，北隅で二つのピット状に分かれて落ち込み，一つは袋状に壁内に入っている。床面には火熱を受けた痕跡は無く，埋土は茶褐色土層であった。柱穴は存在しなかった。



挿図４　１，２号竪穴遺構出土土器

〈出土遺物〉（挿図４(1)(3)(4)(6)　図版２(1)(3)(4)(6)）

埋土中より土師器杯形土器破片，須恵器壺形土器の口縁部破片，胴部破片が出土した。

土師器杯形土器(1)は半分ほどの破片で，推定口径13.4cm，底径 6.0cm，器高 5.6cmの灰黄色のもので，ロクロ水挽き成形，底部に回転糸切痕があり，再調整はしていない。

須恵器壺形土器の口縁部破片(3)は，ねずみ色で，推定口径15.0cm，くの字に口縁部が外反する。ロクロ成形によるもので，胎土焼成とも良好なものである。(4)は推定口径22.0cmの灰白色のもので，ロクロ成形による。胎土焼成とも良好なものである。(6)は壺形土器の胴部の一破片で，ねずみ色を呈しロクロによる成形である。胎土焼成とも良好である。

３．ま　と　め

調査によって発見された１号，２号竪穴遺構は小型であり，柱穴も出土遺物も少ない。類例としては峰浜村城土手[注1]遺跡や能代市大館[注2]遺跡の遺構があるが，性格は不明である。

その年代は，遺構から出土した土師器杯形土器が，後述する「サシトリ台遺跡」出土のものとほ

ぼ同じ形態を有していることから，11世紀前後と考えたい。

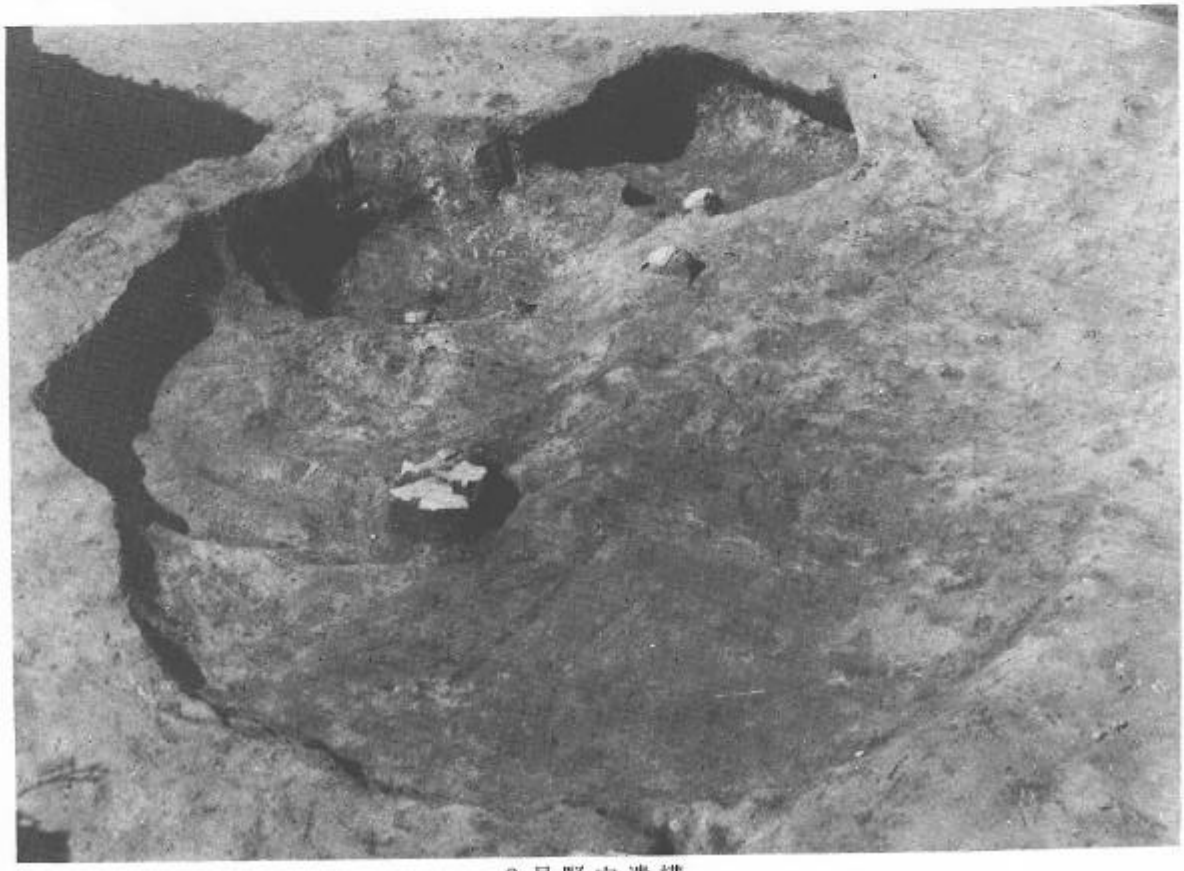
注１　秋田県教育委員会　「城土手遺跡緊急発掘調査報告書」　昭和50年
注２　能代市教育委員会　「能代市大館遺跡(能代営擬定地)」　昭和48年
「大館遺跡発掘調査概報」　昭和49年
「大館遺跡第４次発掘調査概報」　昭和50年

図版1

南山ノ上、サシトリ台遺跡周辺の地形

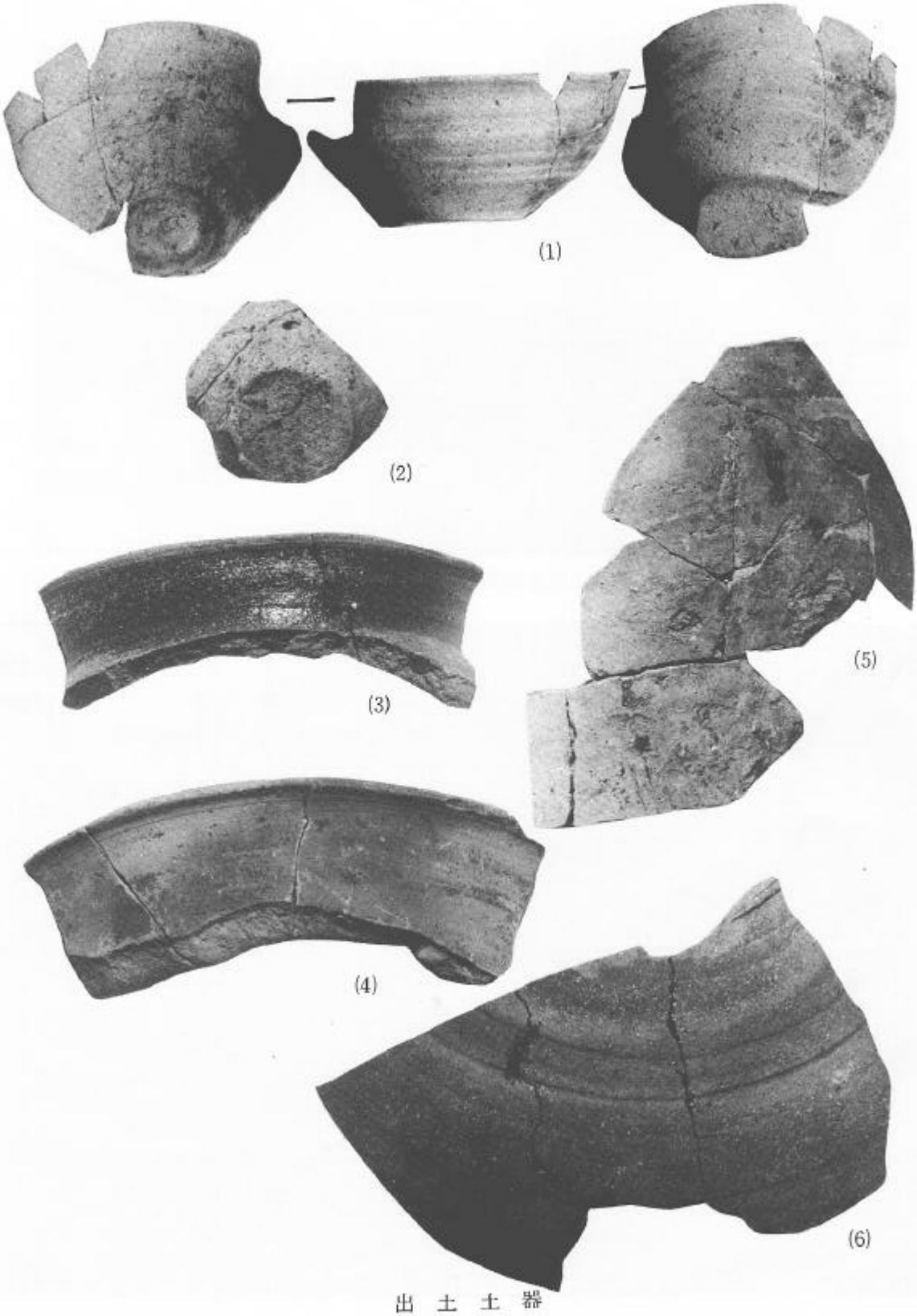
図版 2

遺跡調査前のようす



2 号竪穴遺構

図版 3



出 土 土 器

Ⅲ サシトリ台遺跡

1．調査方法と過程

調査対象地は，ブルドーザーで表土層が削り取られていたが，遺構の遺存状態の良い場所を選定した。

層位は，１層が暗褐色土層で15～30cmあり，この下は，地山の黄褐色ロームであった。

遺構は，黄褐色ローム上面で確認できた。

調査はグリッド方式（２×２ｍ）で実施し，発掘面積は，176m²であった。

調　査　日　誌

８月４日（月）　晴

午前中で南山ノ上遺跡の調査を終了し，午後からサシトリ台遺跡の調査にとりかかる。雑草を刈り取り，グリッドを設定する。

８月５日（火）　晴

発掘にとりかかる。遺構が発見されだした。

８月６日（水）　曇

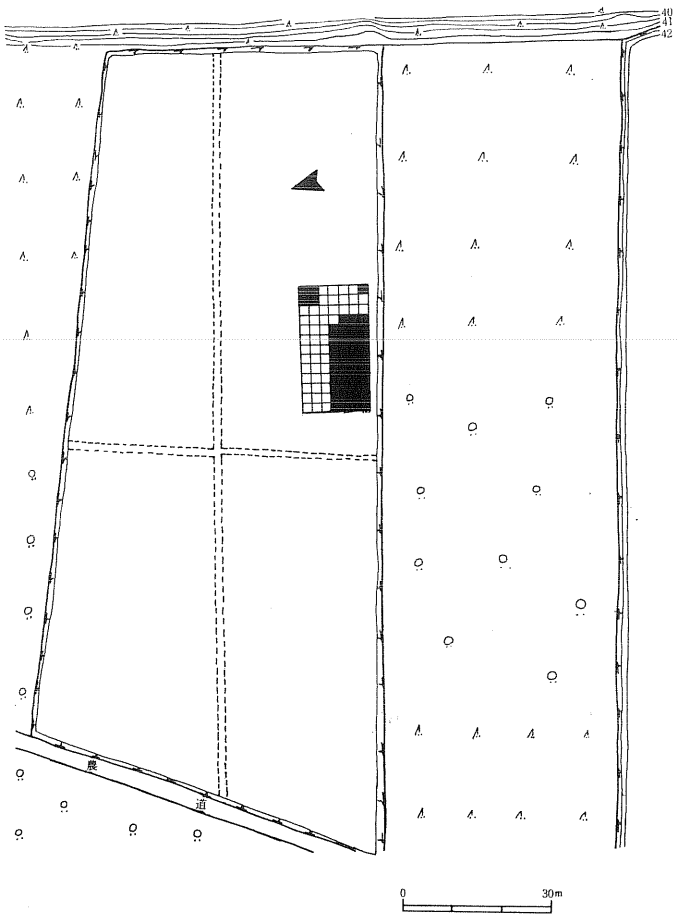
調査区の西側に竪穴住居跡の一部が発見される。出土遺物の写真撮影を開始する。

８月７日（木）　雨のち晴

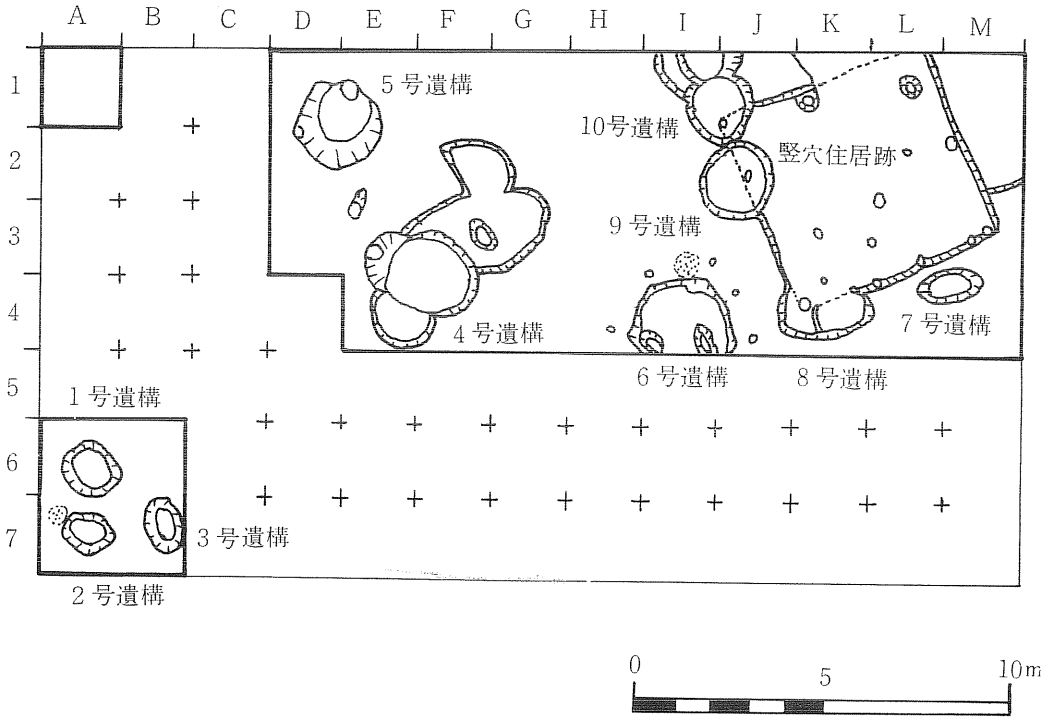
前夜からの雨で遺構の精査が不可能なため，他のグリッドの表土除去作業にとりかかった。

８月８日（金）　晴

竪穴住居跡のプランを確認し，精査する。住居跡内から，須恵器，土師器などの遺物が出土した。須恵器は広口壺で１個体分あるようだ。北羽新報の記者が来跡した。午後３時から，参加者全員による懇親会を外荒巻集会所で開く。



挿図１　サシトリ台遺跡発掘区



挿図2　遺 構 配 置 図

8月9日（土）　晴

遺構の精査。図面取りをする。

8月10日（日）　晴

図面取り，写真撮影を行い，調査を終了する。

2．遺構と出土遺物

1号竪穴遺構

〈遺構〉

ほぼ円形の平面プランをなし，径約 1.7m，深さ約30cmである。床面も円形を呈し，火熱を受けた痕跡はない。

埋土は，暗褐色土層のみであった。

〈出土遺物〉

埋土中より，土師器杯形土器の小片が出土した。

2号竪穴遺構

〈遺構〉

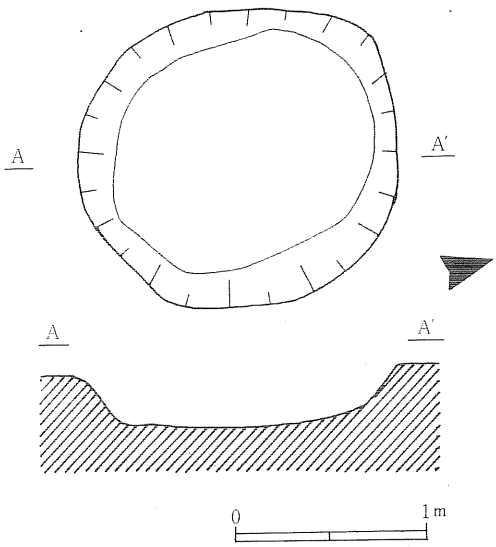
1号竪穴遺構の北に近接して検出された。惰円形に近いプランであり，長径約 1.8m，短径 1.2m，深さ約35cmある。床面には凹凸がみられ，火熱を受けた痕跡はない。埋土は暗褐色土層のみである。

遺構の西壁に，焼土遺構が重複して検出された。焼土遺構は円形をなし，中央部が窪む。焼土の厚さは，約5cmある。

焼土遺構の一部は2号竪穴遺構の埋土である暗褐色土層の上面に存在する。したがって，焼土遺構は2号竪穴遺構より，時間的に新しいことになる。

〈出土遺物〉

埋土中より，土師器杯形土器破片と表面粗末な鉄滓が出土した。



挿図3　1号竪穴遺構

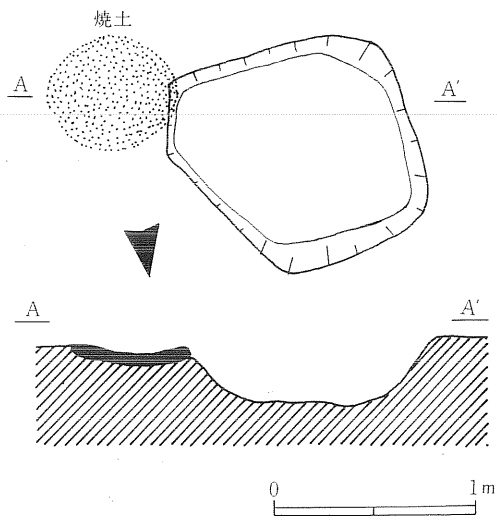
3号竪穴住居跡

〈遺構〉

2号竪穴遺構の西に近接して検出された。平面プランはほぼ円形をなし，径約 1.2m，深さ15～20cmである。床面は大きく凹凸をなすが，火熱を受けた痕跡はない。埋土は暗褐色土層のみである。

〈出土遺物〉

埋土中より土師器杯形土器小片が出土している。



挿図4　2号竪穴遺構

4号竪穴遺構

〈遺構〉

平面形は不整をなしているが，いくつかの竪穴遺構が重複しているためと思われる。遺構の西側には，火熱を受け赤褐色化した床部も認められた。

〈出土遺物〉

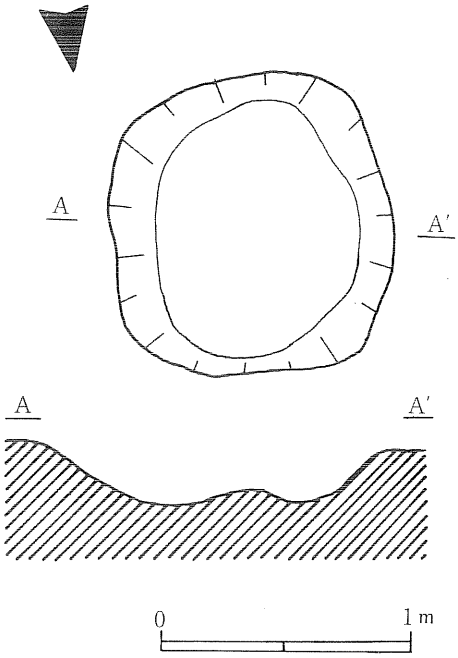
土師器と鉄製品が出土した。土師器には，杯形土器と壺形土器があった。

杯形土器(1～5)は，ロクロ水挽き成形され，底部には回転糸切り痕が認められる。底部周辺へ

の再調整は認められない。1～3は内彎気味に開き，口縁部が外反する。4，5は直線的に開く。焼成は4がもろいが，他は良好である。色調は，1・2・5が赤褐色を呈し，3が灰褐色，4が白っぽい褐色を呈する。胎土は良好である。

壺形土器(6)は，胴部下半が欠損している。巻き上げで成形し，ロクロ調整している。頸部内外面には接合痕が認められる。胴部下半はヘラ削り調整を施しているようである。口縁部はまる味を持って外反する。口唇部は下方を向く。色調は黄褐色をなすが，焼成，胎土は良好といえない。比較的粗雑な作りである。

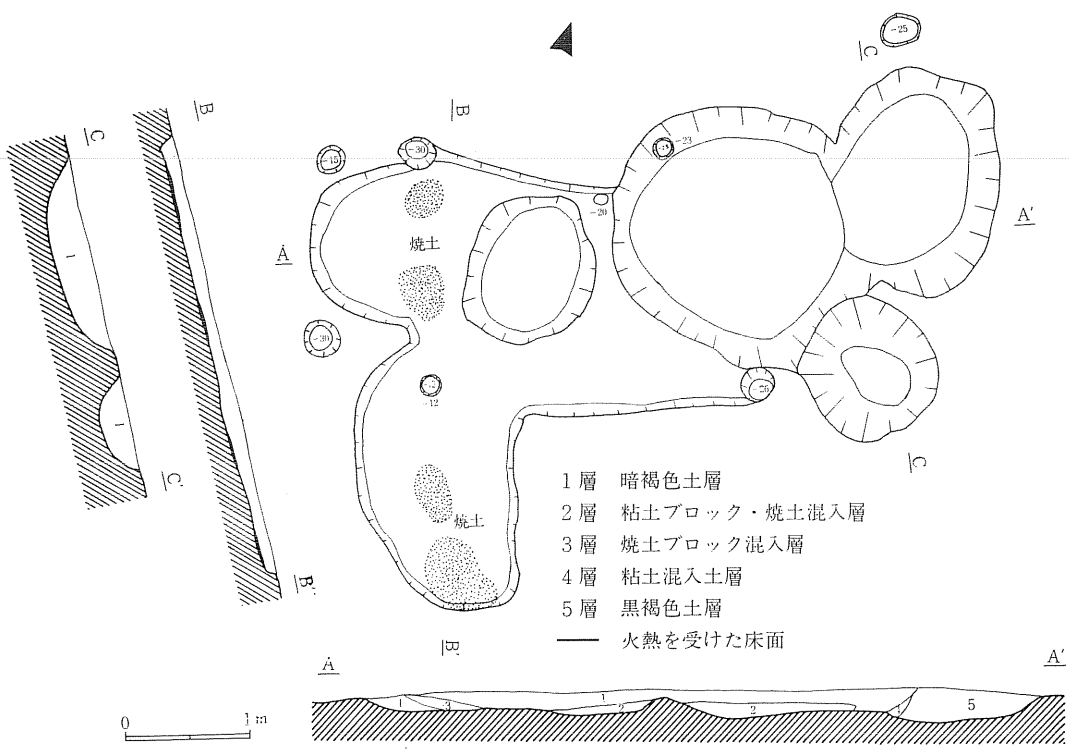
鉄製品(7)は，長さ約8cmの棒状を呈し，断面は円形である。用途は不明。



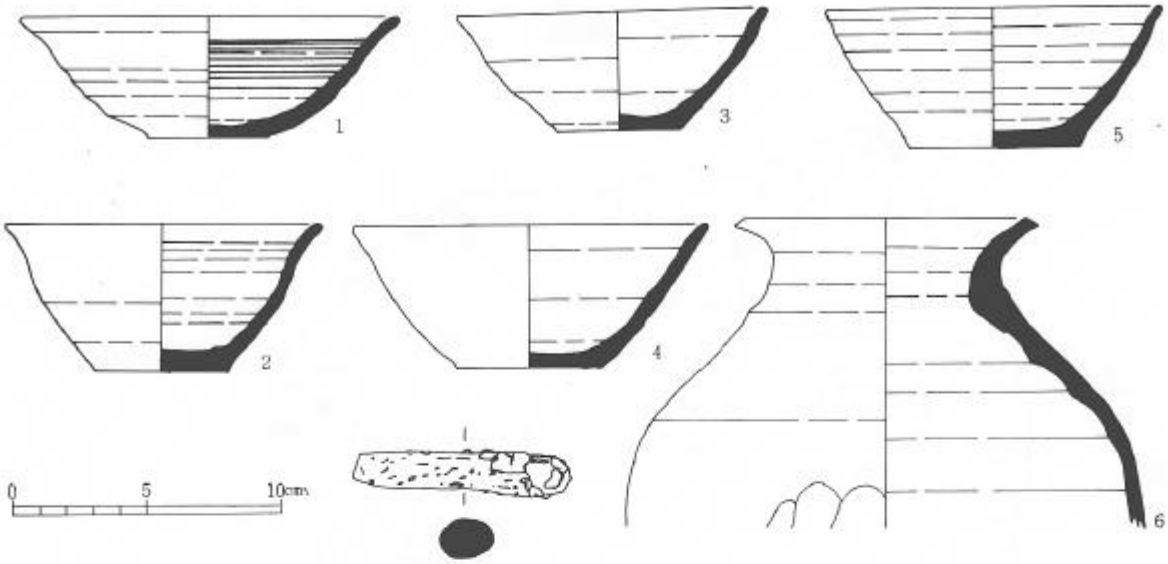
挿図5　3号竪穴遺構

5号竪穴遺構

〈遺構〉



挿図6　4号竪穴遺構



挿図７　４号竪穴遺構出土遺物

円形に近い楕円形を呈する。長径約２ｍ，短径約 1.8ｍを測る。壁は西側が急傾斜をなし，他は緩やかに傾斜する。北側の壁には窪みがあり，凹凸をなしている。深さは15～30cmである。

埋土の層位は，１層が暗褐色土層，２層が焼土ブロック混入の褐色土層，３層が灰，木炭層である。床面と壁は火熱を受け，硬く焼け締っていた。

〈出土遺物〉

遺物はすべて土師器であり，大部分が杯形土器である。土器は床面や，灰木炭層からも出土したが，灰，木炭層の上面から集中的に出土した。完形品はなく，破片のみが遺構全体に平面的な広がりをなし，密集して堆積していた。図示した土器は，かろうじて図上復元できたものだけである。

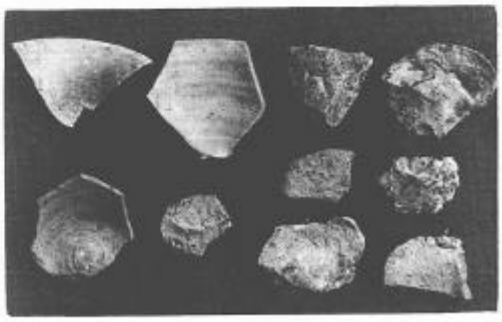
杯形土器(１～５)は，ロクロ水挽き成形され，底部切り離しは回転糸切りによる。器形は，胴部が内彎気味に開き，口縁部がわずかに外反する。色調は赤褐色を呈するが，４には黒斑が認められる。胎土・焼成とも良好である。５は底部が高台状をなし，切り離しの後，指で周縁をなでている。

なお，出土した破片を観察すると，他の遺構の土器より，弾けたような割れ方をしているのや，二次的加熱を受けたものが多く認められる。

６号竪穴遺構

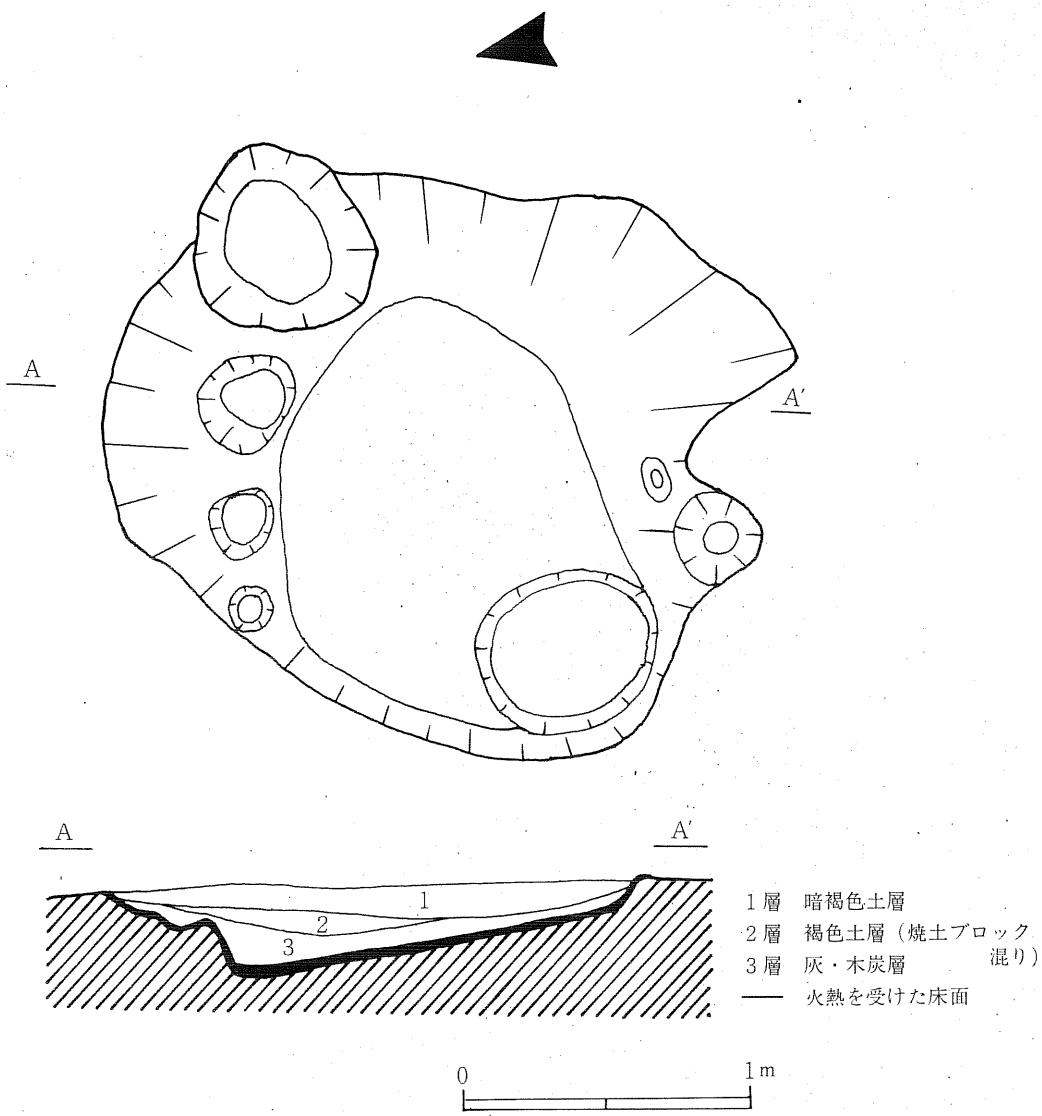
〈遺構〉

遺構の約半分しか調査できなかったが，ほぼ円形に近いプランになると考えられる。深さは約20cmで浅い。床面には深さ約50cmの２個のピットが存在するが，６号竪穴遺構に伴うものかどうか不明である。

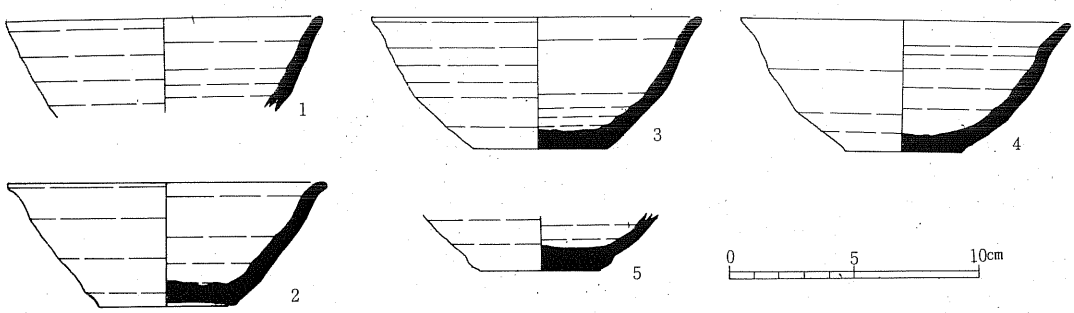


５号竪穴遺構出土の土器片

また，遺構の南壁には，径約50cmの焼土遺構が存在



挿図8　5号竪穴遺構

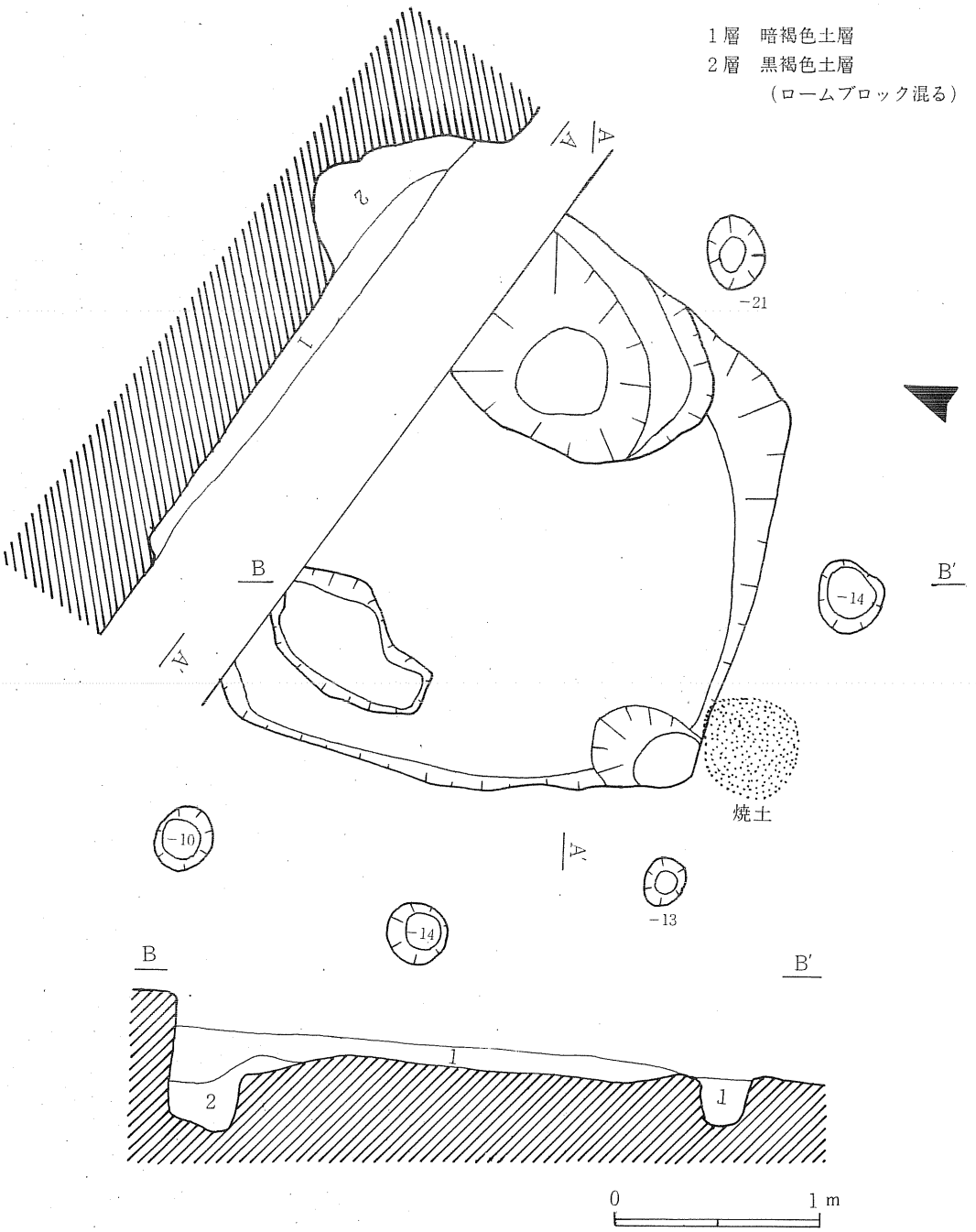


挿図9　5号竪穴遺構出土遺物

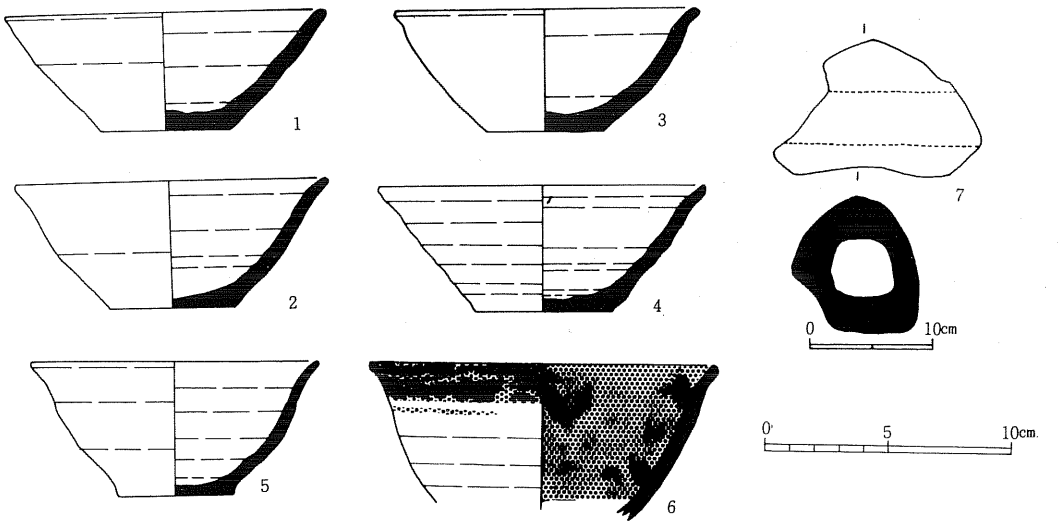
する。この焼土遺構は，６号竪穴遺構と重複していて，時間的には新しいものである。２号竪穴遺構に重複して検出された焼土遺構に近似する。

〈出土遺物〉

土師器杯形土器とフイゴロが出土した。



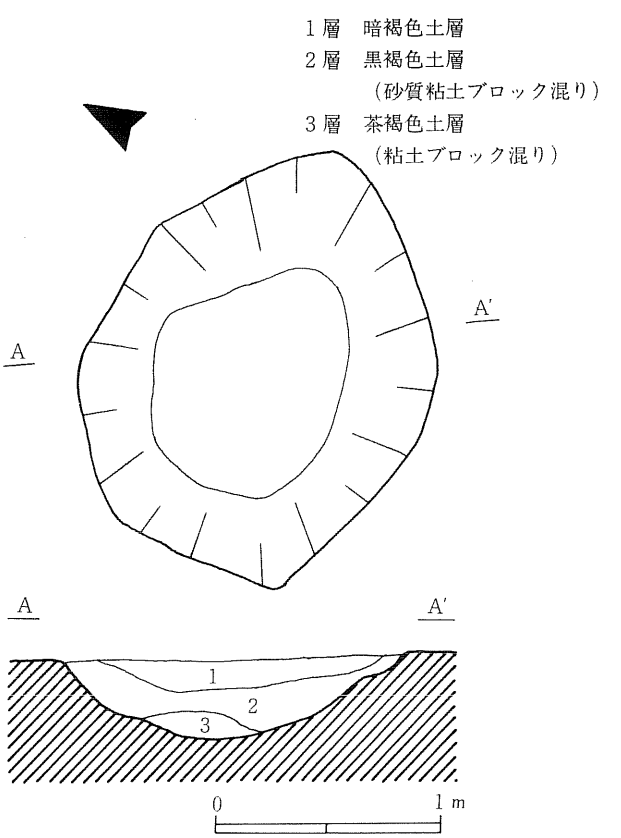
挿図10　６号竪穴遺構



挿図11　6号竪穴遺構出土遺物

杯形土器(1～6)は，ロクロ水挽き成形され，底部には回転糸切り痕が認められる。底部周辺への再調整は認められない。胴部は内彎気味に開き，5・6の口縁部は外反する。焼成はいずれも良好である。色調は，1が内外面とも黒褐色であり，外面が黄褐色を呈する。また，3は内外面とも褐色であり，4・5は赤褐色を呈する。4・5には黒斑が認められる。6は黒色処理された土器である。内面はていねいにヘラ磨きされた後，黒色処理されている。ヘラ磨きの方向は，胴部が縦方向に，口縁部が横方向に施されている。口縁部外面も横方向のヘラ磨きの後，黒色処理されている。胴部外面には黒色処理もヘラ磨きも認められない。この土器の焼成・胎土・色調は，1に類似する。

フイゴロ(7)は，竪穴遺構内の西側ピットの埋土中より出土した。土製のフイゴロである。両端が欠損しているが，現存



挿図12　7号竪穴遺構

する長さは約17cm，高さ約12cmある。底部はほぼ平坦で，全体的には円筒形を呈する。内口径は約5cmである。端部の一端には，溶融した鉄滓が内外面に付着している。

7号竪穴遺構

〈遺構〉

竪穴住居跡の北壁近くに検出された。平面形は惰円をなし，長軸約 1.9m，短軸約 1.5m ある。深さは約35cmで，埋土の層位は，1層が暗褐色土層，2層が砂質粘土ブロック混入の黒褐色土層，3層が粘土ブロック混入の茶褐色土層である。床面，壁とも火熱を受けた痕跡はない。

〈出土遺物〉

埋土中より，土製フイゴ口破片が出土した。

8号竪穴遺構

〈遺構〉

竪穴住居跡の北東コーナーに重複して検出された。埋土は竪穴住居跡の1層と同じで暗褐色土層であった。竪穴住居跡との時間的前後関係は，埋土の層位的観察からは不明であった。

〈出土遺物〉

遺物は発見できなかった。

9号竪穴遺構

〈遺構〉

竪穴住居跡の東壁に重複して検出された。径約 1.9m の円形プランであり，深さ約35cmである。床面は平坦であるが，火熱を受けた痕跡はない。埋土中に，竪穴住居跡の床面と考えられる粘土層（貼床）が入っているので，竪穴住居跡よりは古いものと考えられる。

〈出土遺物〉

埋土中より，土師器杯形土器の小片が出土した。

10号竪穴遺構

〈遺構〉

竪穴住居跡の南東コーナーに重複して検出された。平面は円形をなし，径約 1.8m，深さ40cmである。床面は平坦で，火熱を受けた痕跡はない。竪穴住居跡の埋土である暗褐色土層の上面でプランを確認することができた。したがって，この遺構は竪穴住居跡より新しい。

〈出土遺物〉

埋土中より土師器破片が出土した。

竪穴住居跡

〈遺構〉

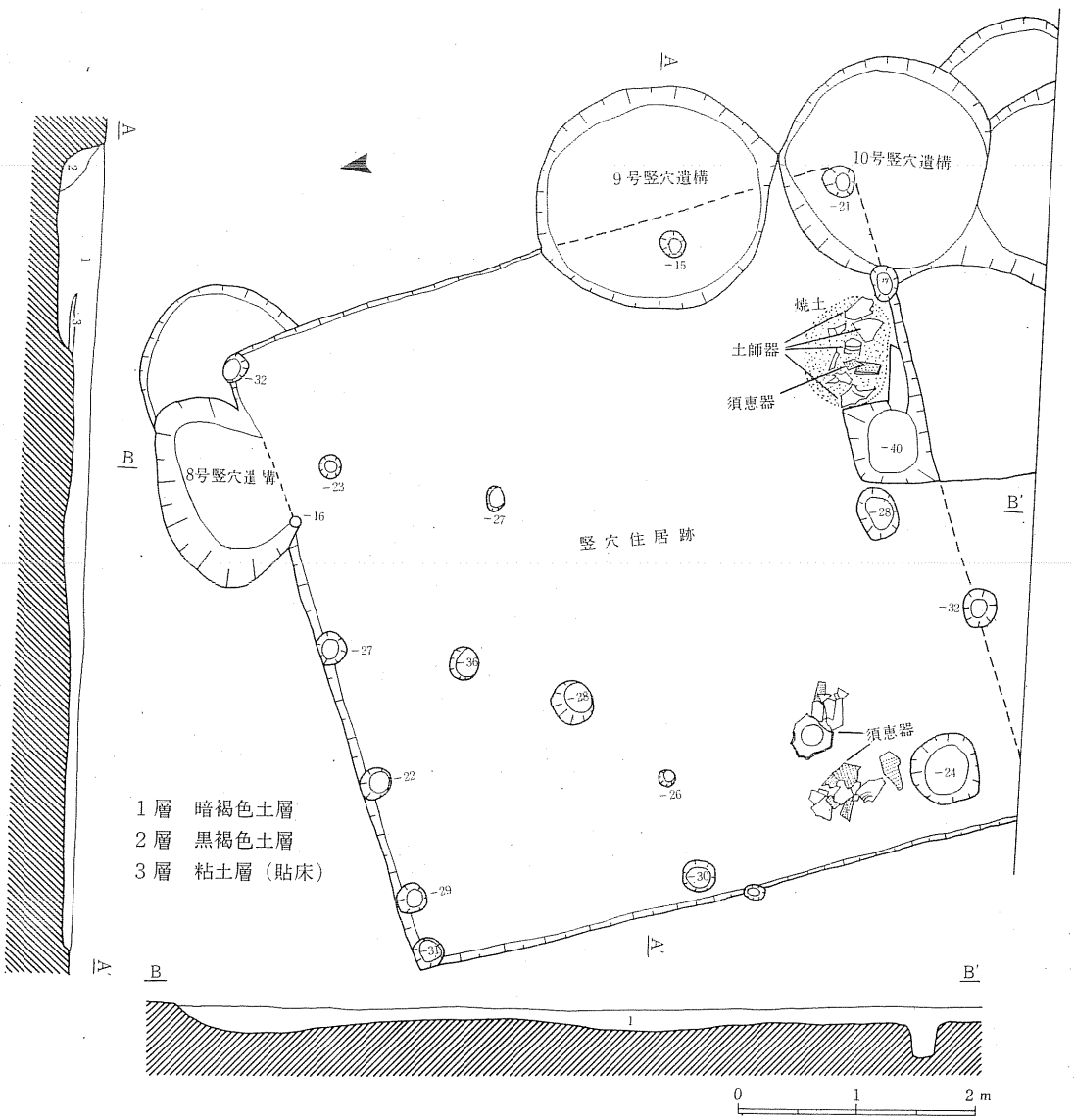
調査区の南西コーナー付近で検出された。

一辺約 5.5m の方形で，各辺は東西南北にほぼ一致する。

壁は，８・９・10号竪穴遺構と重複しているため完全ではないが，西壁はよく残っている。壁の高さは約10cmと低く，70°～80°の傾斜で立ち上がる。

床面は平坦で，全体として堅く締っているが，中央部から東壁にかけてブロック状に剥離する部分があった。

南壁の中央部から東寄りの床面は，火熱を受け赤褐色に変色している。この上には，焼土および粘土ブロックが須恵器，土師器とともに堆積していた。焼土および粘土ブロックの堆積は，かまど本体が破壊されたものであり，床面の火熱を受けた部分は火床部と考えられる。なお，煙道と思わ



挿図13　竪穴住居跡，８号，９号，10号竪穴遺構

れる施設は発見できなかった。

柱穴は壁に沿って検出された。住居跡内にも柱穴状のピットが存在したが，住居跡に伴ったものかどうか不明である。

その他の施設としては，かまどと思われる部分の西側と住居跡内南西コーナーにもピットが存在した。前者は貯蔵穴と考えられる。後者は，このピット近くから丸底の大型広口壺が出土したことから，丸底壺を定置するためのものと考えられる。

〈出土遺物〉

土師器，須恵器，青（白）磁，鉄製品が出土した。土師器には，杯形土器，甕形土器，鉢形土器，土製支脚がある。

杯形土器（１～２）は，ロクロ水挽き成形され，底部には回転糸切り痕が認められる。胴部から内彎気味に開き，口縁部が外反する器形を呈する。底部切り離しは回転糸切りにより，底部周辺への再調整はみられない。色調は赤褐色を呈し，焼成はさして良くない。

甕形土器(3)は，胴部以下を欠損している。輪積み成形された後，ロクロ調整されている。口縁部は「く」の字型に外反する。色調は褐色を呈する。外面には炭化物が付着している。

鉢形土器(4)は，破片であるため全体を知ることはできないが，推定口径約38cmの土鍋形を呈するものと思われる。成形技法は不明であるが，内外面ともロクロ調整されている。焼成は良好で，赤褐色を呈する。外面に黒斑が認められる。

土製支脚[1](5)は，巻き上げで成形していて，粘土紐の接合痕が内外面に明瞭に残る。器形は円筒形をなし，口縁部には２個の「U」字状の切り込みが相対して存在する。

口縁部と内面は，二次的加熱を受け赤色化している。胴部外面には乳白色の物質が付着する。この土器はかまどの火床部と考えられるところに，切り込みのある口縁部を下に向け，立った状態で検出された。

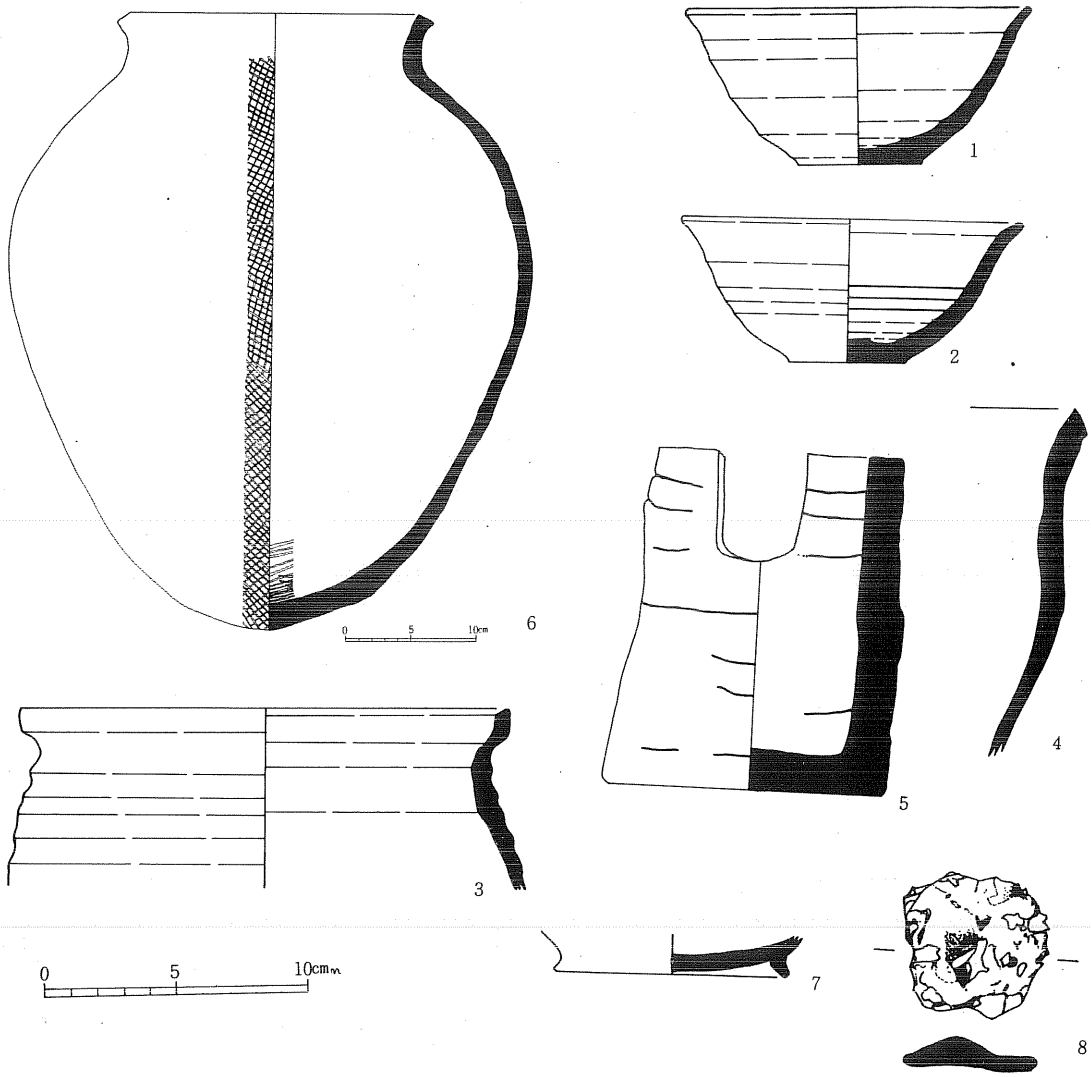
須恵器(6)は，広口壺形土器である。高さ約48cm，最大径約40cm，口径約22cmを測る。肩部は円味を持ち，底部は丸底である。口縁部は円味を持って外反し，口唇部は下方を向く。外面は頸部から円底にかけて，格子目の叩き痕が認められる。内面は底部にのみ平行叩き目が認められる。胎土，焼成とも良好である。色調は灰色を呈する。

青（白）磁[2](7)は，低い環状の高台を持つ。外面には青緑色の釉が，部分的に施釉されている。胎土は灰白色をなし精選されている。ていねいな作りである。

鉄製品(8)は，ほぼ円形を呈し，径約５cmある。鉄製の紡錘車とも考えられるが，中心孔が認められない。

３．ま　と　め

遺構について



挿図14　竪穴住居跡出土遺物

検出された遺構は，竪穴住居跡・竪穴遺構，焼土遺構に大別できる。

〈竪穴住居跡〉

1辺約 5.5m の大型をなす。山本郡内でも土師器・須恵器を伴う竪穴住居跡は，能代市大館遺跡で発見されているが，[3] このような大型のものはない。県内の発掘例は，鹿角郡鹿角市紫平菩提野9号竪穴住居，[4] 雄勝郡羽後町城神廻り竪穴住居跡，[5] 仙北郡田沢湖町生保内武蔵野6号竪穴住居跡[6]などである。

〈竪穴遺構〉

円形および惰円形の竪穴遺構は，床面が火熱を受けているものと，そうでないものに別けること

ができる。

前者は，4号竪穴遺構の一部と5号竪穴遺構とである。5号竪穴遺構の特徴をまとめると，

a　床面が火熱を受け，赤褐色に変色している。

b　床面上に木炭・灰層が存在する。

c　木炭・灰層の上面には，土師器片が密集して堆積している。埋土層位は整然としていて，投げ込まれた状況とは考えられない。

d　土器片の中には，弾け割れたと考えられる割れ目を呈するものや二次的加熱を受けた破片が多くある。

以上の点から，この竪穴遺構は，酸化焔による土師器焼成窯でないかと推定される。類例は，秋田県雄勝郡羽後町足田門田遺跡[7]，岩手県江刺市瀬谷子遺跡[8]などで発見されている。

後者の床面が火熱を受けない竪穴遺構は，類例が増加してきているが，性格は不明である。山本郡内の出土例は，峰浜村城土手遺跡[9]，能代市浅内ムサ台遺跡[10]，能代市大館遺跡[11]などである。

6号竪穴遺構は，周囲に柱穴がめぐっている。小屋風の建物でなかったかと考えられる。

〈焼土遺構〉

径約50cmの円形を呈する焼土遺構は，近くからフイゴロ・鉄滓などが出土していることから，小鍛冶作業のための火床ではないかと考えられる。

遺物について

〈須恵器〉

出土した須恵器は，竪穴住居跡内の大型丸底の広口壺であり，杯・皿形のものは伴出しない。大型丸底の広口壺の類例は，青森市近野遺跡第19竪穴住居跡[12]から出土している。

〈土師器〉

土師器は杯・甕・壺・鉢形土器のほか土製支脚などが出土した。

竪穴住居跡内においては，杯・甕・鉢形土器と土製支脚がセットをなす事実を把握することができた。

杯形土器は，すべてロクロ成形され，底部に回転糸切り痕を有す。黒色処理された土器は杯形土器1点のみである。

土製支脚は，製塩土器として考えられている[13]。サシトリ台遺跡は，日本海から約4km離れており，地形変動がないかぎり，この遺跡で製塩していたとは考えられない。出土状況から考えて，かまどの支脚または袖の芯材として転用したものと考えられる。かまど袖の芯材として利用した例は，青森市近野遺跡第2号竪穴住居跡[14]にある。

この種土器の秋田県内における出土例は，男鹿半島周辺[15]，能代市ムサ台遺跡[16]，峰浜村沢目地区[17]などであり，日本海沿岸に分布する。

〈青（白）磁〉

唐末から北宗の時期に製作されたものと考えられている。[18] 類例は現在のところみあたらない。

〈鉄製品および鉄滓〉

鉄製品は，４号竪穴遺構出土の棒状のものと，竪穴住居跡内出土の円盤状のものとがある。いずれも用途は不明である。

鉄滓は表面が粗雑である。また，発掘区の近くからは椀形鉄滓が表採されている。これら鉄滓は，製鉄遺構の小鍛冶作業にともなって発生するといわれる。[19] サシトリ台遺跡の性格を考える上で重要である。

〈フイゴ口〉

６号と７号竪穴遺構から，土製のフイゴ口が出土した。７号竪穴遺構出土のフイゴ口は，溶融した鉄滓が先端部に付着し，その一部はフイゴ口内まで流れ込んでいる。このことから製鉄作業に使用されたことは明白である。

年代について

今回の調査では３カ所において，遺構の重複関係が確認された。２号竪穴遺構と焼土遺構，６号竪穴遺構と焼土遺構，竪穴住居跡と８号，９号，10号竪穴遺構がそれである。

各遺構に共通した出土遺物は，土師器杯形土器であり，ロクロ水挽き成形・回転糸切りによる切り離し，底部周辺の非再調整など共通した特徴を持っている。したがって，時間的新旧関係は認められるが，ほぼ同時期の遺構と考えられる。

さて，東北地方においては，ロクロ成形・回転糸切り土師器杯形土器は，古代土器編年上,「表杉ノ入式」として位置づけられている。[20][21] また，今回の調査では，黒色処理された土器は１点のみで低い出土率であること，皿形土器・高台付皿形土器の出土がないこと，[22] 唐末から北宗期製作と考えられる青（白）磁が共伴することなどが判明した。

以上のことから，本遺跡の年代を11世紀前後と考えたい。

注(1)　北林八洲晴「青森県陸奥沿岸の製塩土器(予報)」考古学研究第18巻（昭和47年）内の用語を使用させていただいた。

(2)　小野正人氏（秋田県文化財専門委員）の御教示による。

(3)　能代市教育委員会「能代市大館遺跡(野代営擬定地)」（昭和48年）「大館遺跡発掘調査概報」（昭和49年）「大館遺跡第４次発掘調査概報」（昭和50年）

(4)　文化財保護委員会「大湯町環状列石」（昭和28年）

(5)　秋田県教育委員会「羽後町足田遺跡発掘調査概報」（昭和39年）

(6)　田沢湖町教育委員会「武蔵野竪穴住居址群第一次調査報告」（昭和42年）

(7)　羽後町教育委員会「足田門田遺跡発掘調査報告書」（昭和47年）

(8)　窯業史研究所「瀬谷子窯址群　第２次緊急調査概報」（昭和45年）

(9)　秋田県教育委員会「城土手遺跡緊急発掘調査報告書」（昭和50年）

(10)　昭和50年３月に調査されたが，報告書未刊。出土品は浅内公民館で保管。

(11)　(3)に同じ

(12)　青森県教育委員会「近野遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)」（昭和49年）

(13)　(1)に同じ

(14)　(12)に同じ

(15)　磯村朝次郎「秋田県沿岸における土器製塩に関する予察」男鹿半島研究第２号（昭和48年）

(16)　(3)に同じ

(17)　峰浜村水沢小学校で保管していたが，現在不明である。写真が残っている。

(18)　(2)に同じ

(19)　窪田蔵郎「鉄の考古学」雄山閣（昭和48年）

(20)　岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」研究紀要１　多賀城跡調査研究所（昭和49年）

(21)　氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯（昭和32年）「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって――奈良・平安期土師器の諸問題をめぐって――」柏倉亮吉教授還暦記念論文集　山形県の考古と歴史」山形県史学会（昭和42年）

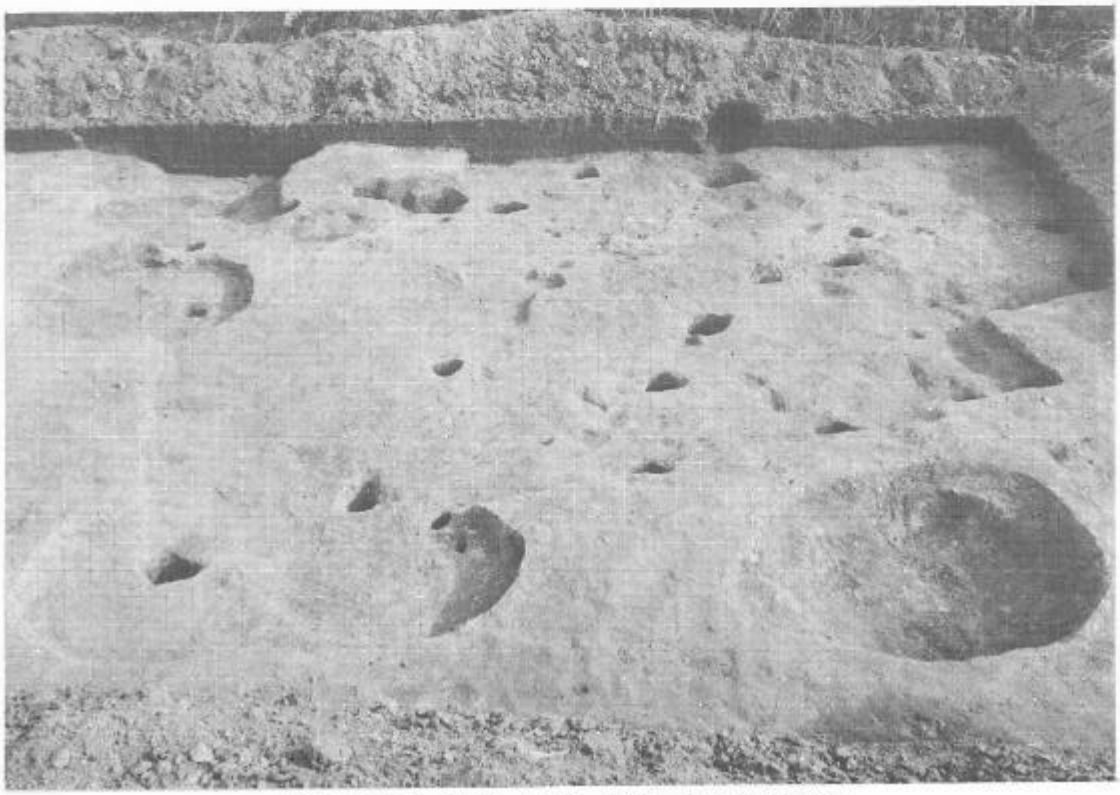
(22)　能代市ムサ台遺跡では，岩手県平泉館出土の皿形土器に類似する土器や，高台付皿形土器が出土している。

最後になりましたが，本報告をまとめるにあたりましては，秋田大学教授新野直吉，秋田県文化財専門委員小野正人，東北歴史資料館副館長氏家和典，工藤雅樹，藤沼邦彦，多賀城跡調査事務所桑原滋郎，石川県郷土資料館吉岡康暢，秋田県立博物館富樫泰時，秋田城跡調査事務所小松正夫，日野　久，石郷岡誠一，能代市教育委員会川村　正，の諸先生に色々ご指導とご教示をいただきました。

また，平泉中尊寺の北嶺澄仁氏には，資料閲覧について便宜をはからっていただきました。ここに記して厚く御礼申しあげます。

図版1

発掘前のようす



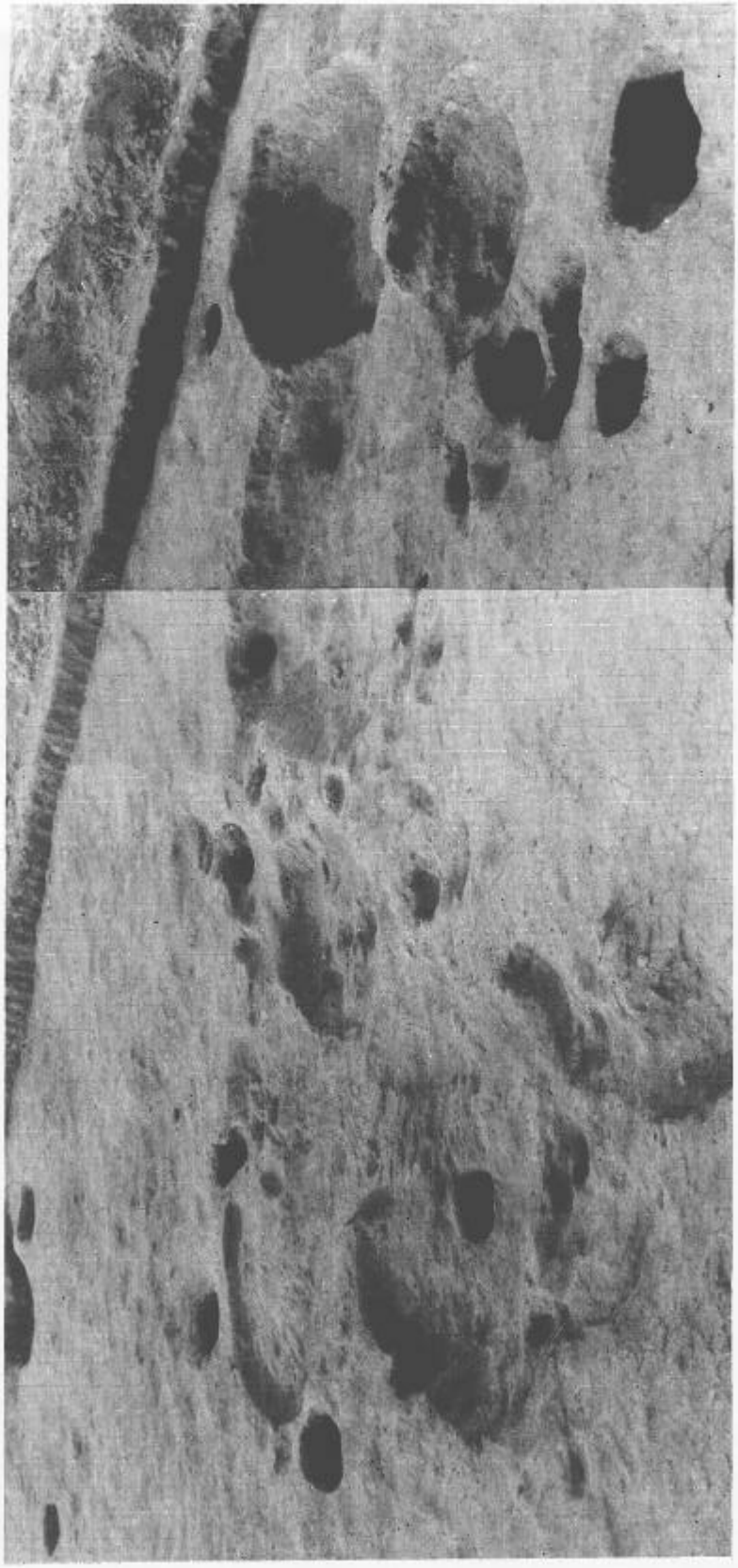
竪穴住居跡，7号，8号，9号，10号竪穴遺構

図版 2

竪穴住居跡内遺物出土状況

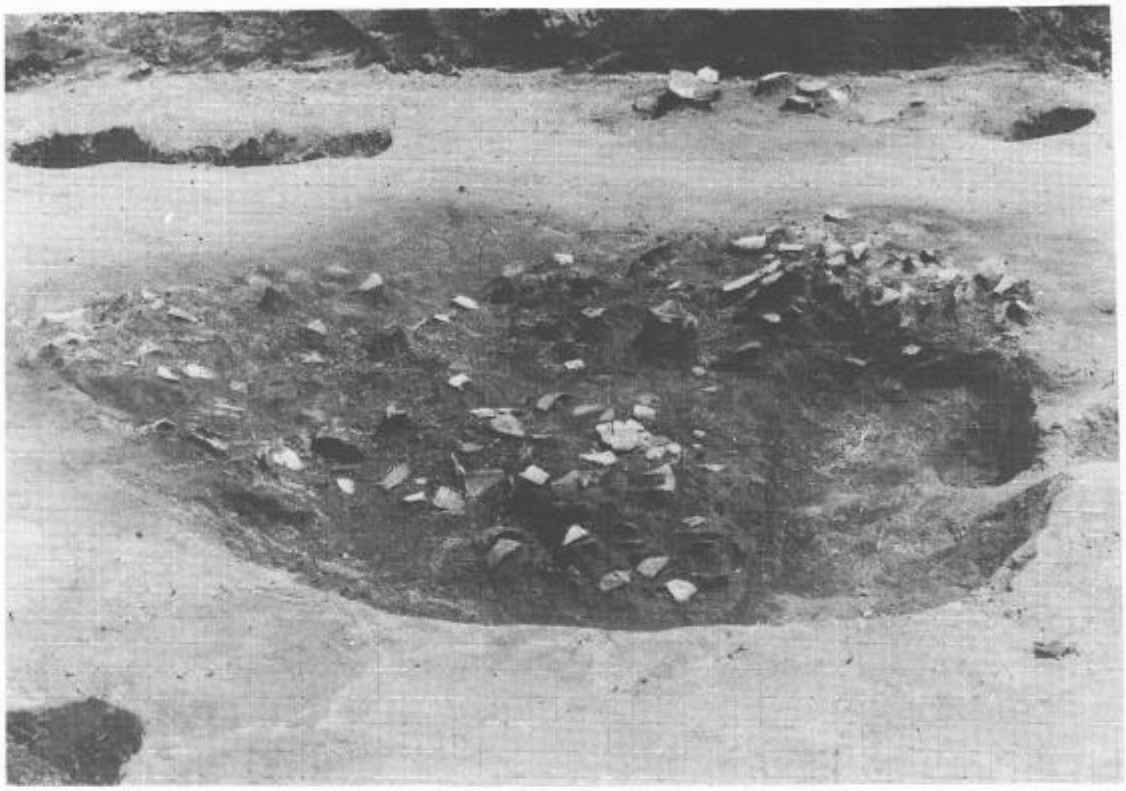
竪穴住居跡内焼土上の遺物出土状況

図版3

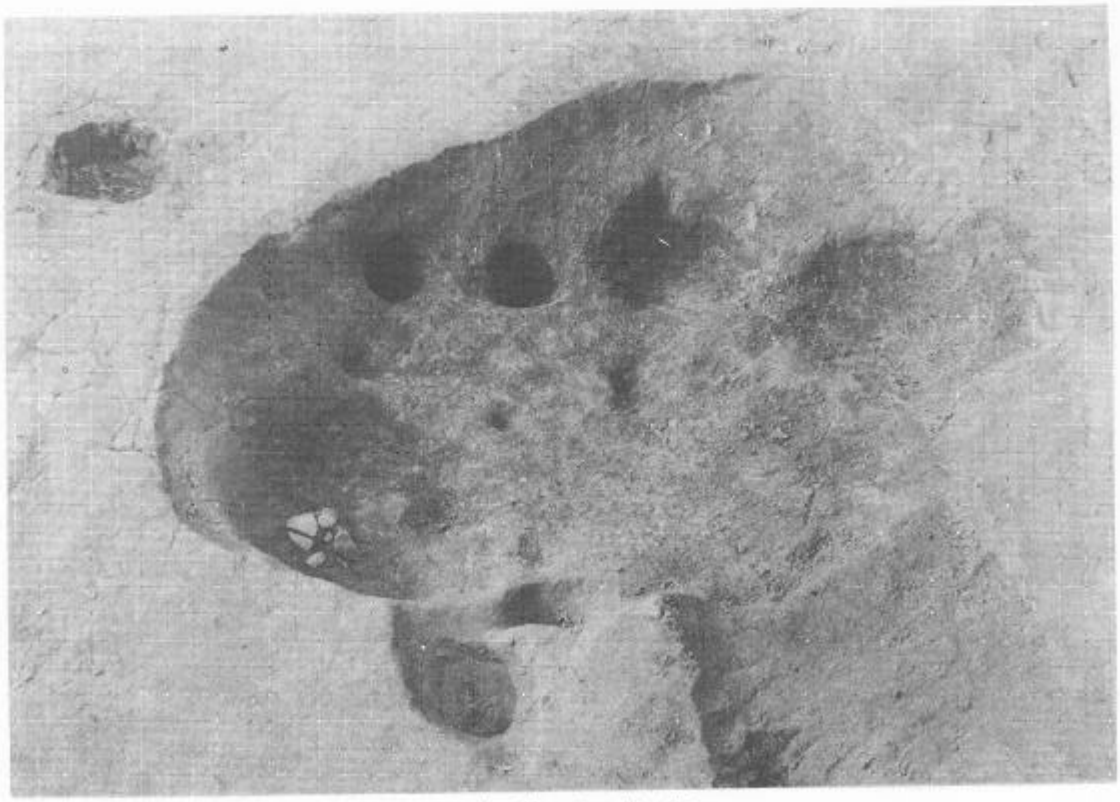


4号墓穴遺構

図版 4

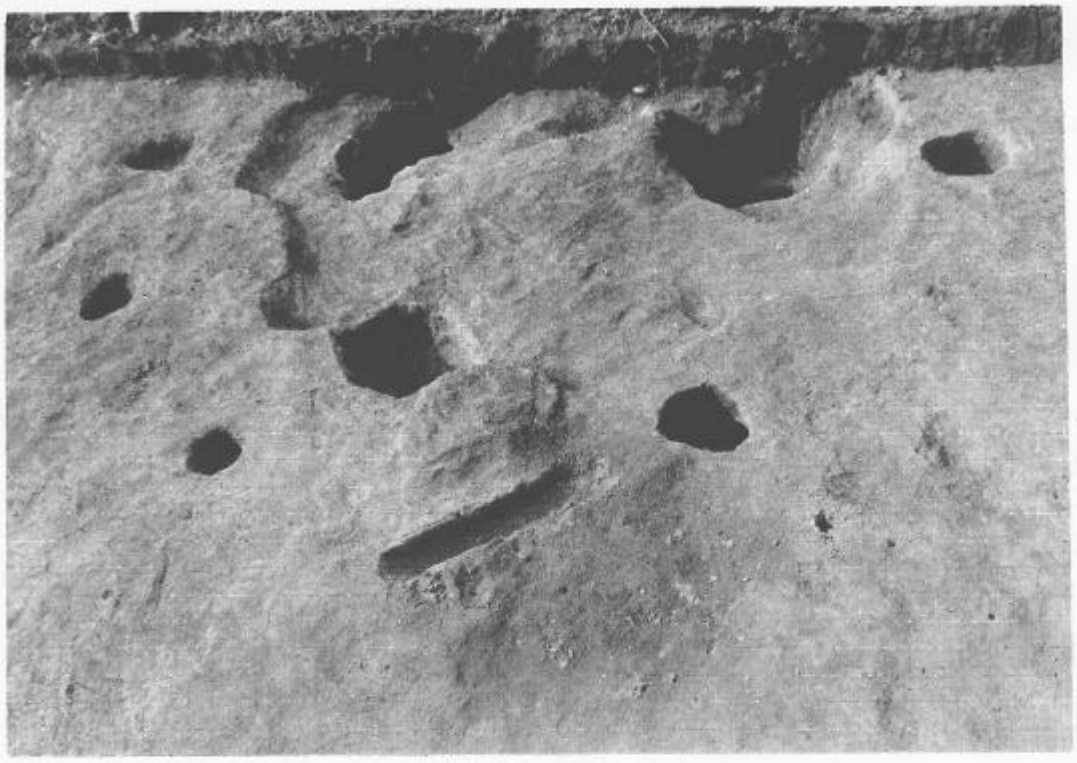


5 号竪穴遺構遺物出土状況



5 号 竪 穴 遺 構

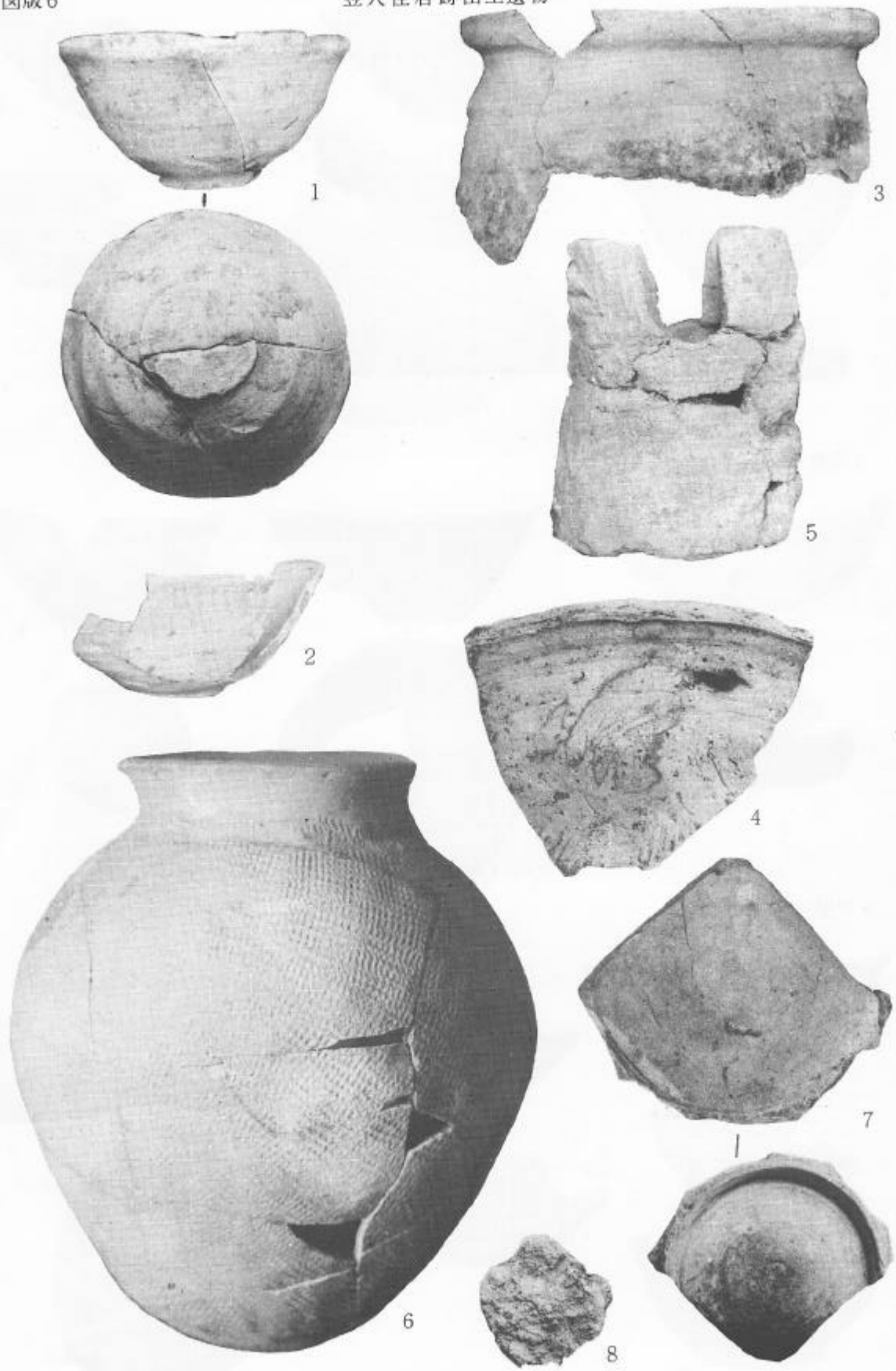
図版5



6 号 竪 穴 遺 構

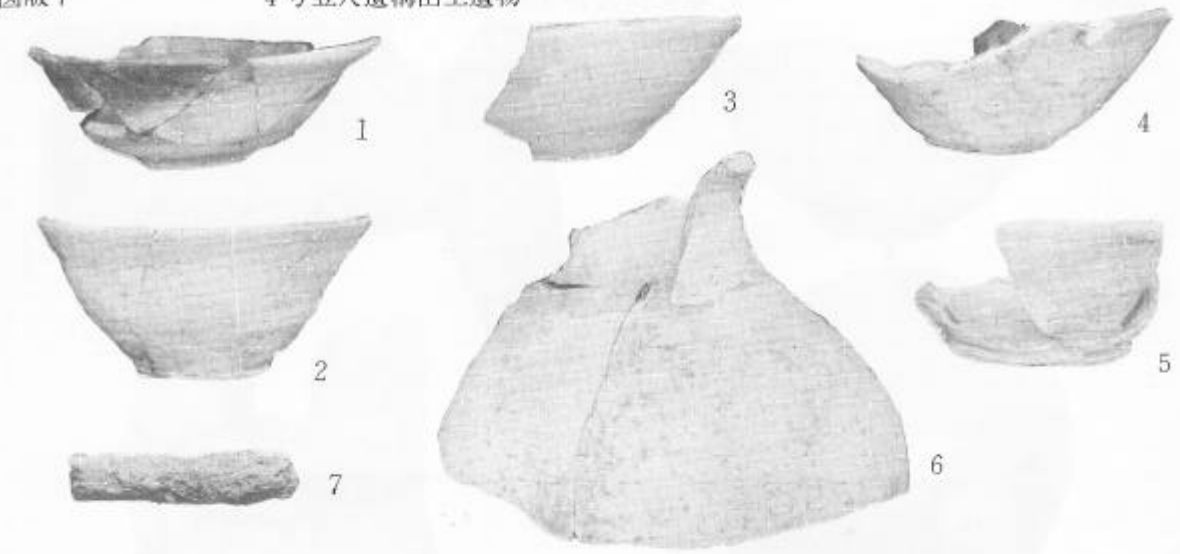
6号竪穴遺構フイゴ口出土状況

図版6　　竪穴住居跡出土遺物

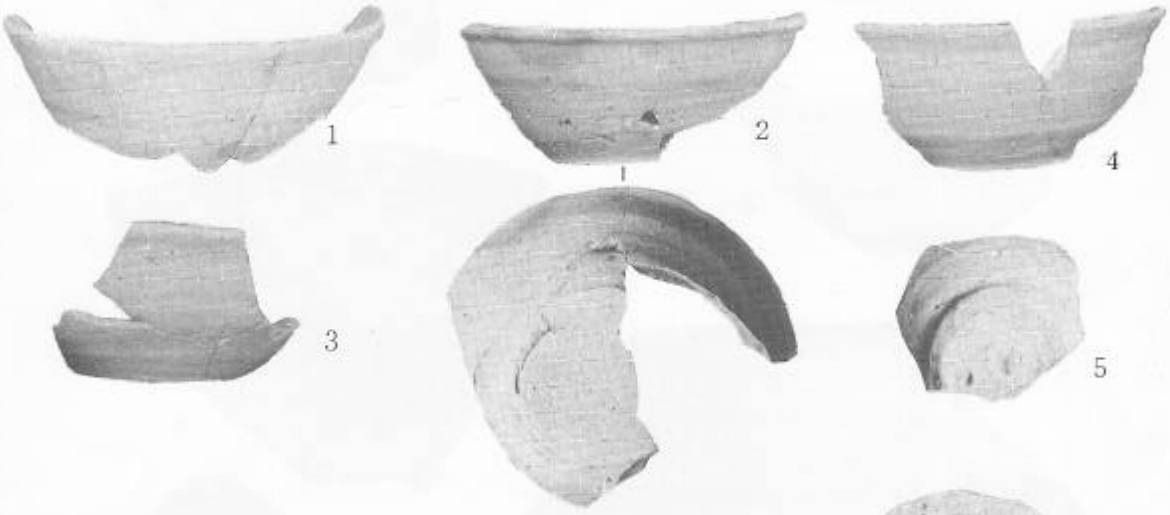
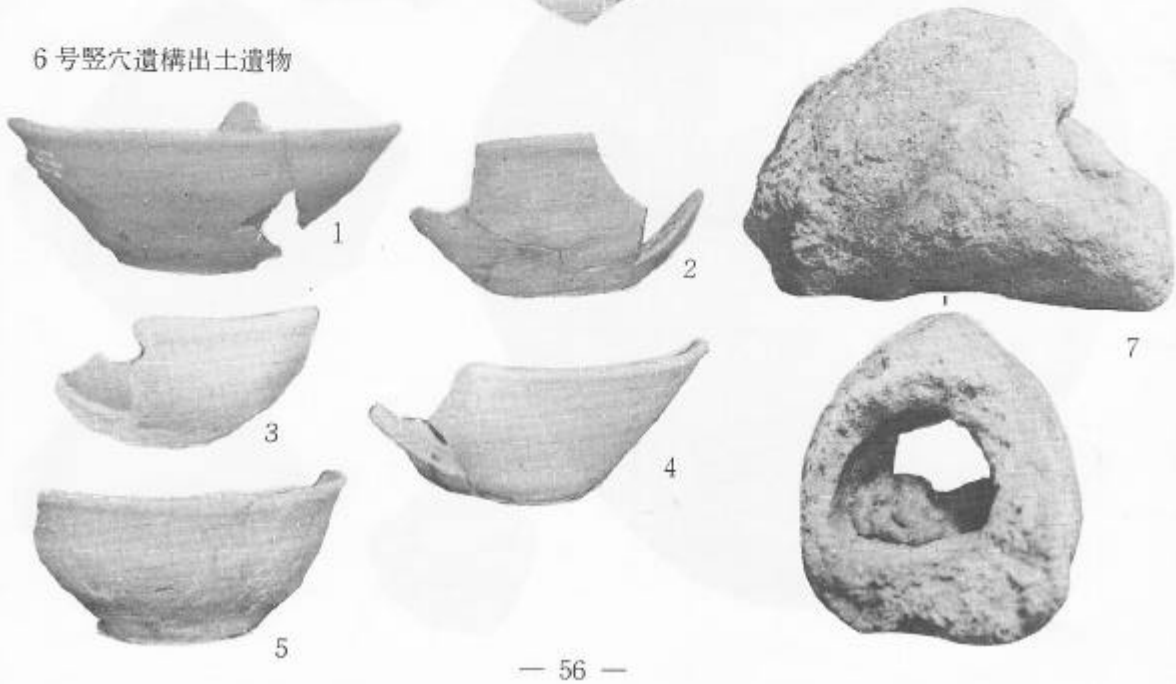


図版 7

4 号竪穴遺構出土遺物



5 号竪穴遺構出土遺物



6 号竪穴遺構出土遺物